

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

f a t e / z e r o ～ノーライフキング～

### 【作者名】

おかげり伯爵

### 【あらすじ】

幸せな家庭から地獄へと落とされた少女。  
心を無くしかけていた少女の元に召喚されたのは最強最悪のサー  
ヴァントだった!?

ヘルシングとf a t e / z e r o のクロスになります。  
ランスロットは登場しません。

旦那好きな皆さんこの指止まれ!!

桜視点のみで進行します。

原作沿いですが全く同じではありません。  
軽い気持ちで読んで頂けると幸いです。

完結。

## おかえり伯爵

私は暗い暗い穴の中で食られ作り替えられていく。  
昔の記憶は薄れていき今ではお祖父様の許しがなければ息をする  
ことすら出来ない。

「——あ」

全身を、体内を這いまわる蟲。

刻印蟲と呼ばれるそれは私を犯し私を狂わし私を壊す。  
いつからだろうか。

私の感情というものが消えていったのは。

今の私は翻られるのをまるで他人事のように感じていた。

「呵呵・・・桜よ、お前は良い器になりそつじや。雁夜よさうは思わん  
か？」

最早人間とは思えぬ姿になつても生にしがみつく怪物。  
虫を操り人を弄ぶ老人。  
この方こそ私のお祖父様の間桐臘硯。  
私はお祖父様には逆らえない。  
でなければ私は直ぐにでも壊されてしまつのだから。

「貴様——臘硯!! もうここまで桜ちゃんを弄ぶ気だ!!」

「言つたであらつて。お前が聖杯を手にするまでは教育を続けると。桜  
を助けたければさつわと聖杯をもつてくるんじやな」

雁夜おじさんは悔しそうに歯を食いしばる。  
私の事なんて放つておいてくれて良いのに。

馬鹿なおじさん。

お祖父様に逆らつて生きてこられたわけがないのに。

「それよりも今宵はサー・ヴァント召喚の儀を行うのじゃが覚えて来たのじゅうづな？」

「当たり前だ。必ず聖杯は手にしてやるから桜ひやんには無理をさせんなよ間桐臘硯!!」

「生意氣な口を利く前にサー・ヴァントを召喚してみせよ。お前にせつた刻印蟲があつても怪しいものだからの」

お祖父様は蟲藏から出て部屋に来いとおっしゃられたのでその通りにしました。

シャワーを浴びて、鏡を見てみると鏡に写る私の顔は昔のような輝きはありませんし、髪の色も紫掛かった間桐の色に染められています。

悲しみなんでもうありません。

だつて感情を見せればみせるほどお祖父様が喜ぶだけだもの。

私は人形。

お祖父様の言いつけを守る人形。

人形だったら傷つく事もないから。

だから私は人形でいい。

「来たか桜よ。お前を救うと豪語した叔父に向か言ってやれ。もしかすると助けてくれるかもしれんぞ？」

お祖父様は面白そうに私に言います。

私に期待を持たせてからまた絶望させるお積もりなんでしょう。でも私は人形ですからそのような期待はしません。

「呵呵。雁夜よ、桜が何か言いたいそつだぞ」

「じいじの桜ちゃん？」

顔の半分が蟲の影響で壊死し、髪は白く老人のようになったその姿はお祖父様に逆らつた罰なのでしょう。

それでも必死に笑いかけるこの人は哀れで可愛想です。

「がんばって」

心にもない言葉が口から漏れます。

私の言葉でこの人が少しでも安心出来たらと少し思つてしまつたのかもしれません。

私の為に命を捨てようとしているのですからこのくらいは良いでしょう。

幸いお祖父様も笑つていらっしゃいますのでお仕置きはされないと想います。

「ああ。必ず助けてあげるからね」

嬉しそうに微笑むおじさんは見ていられません。

未来などわかりきつていてるのでですから。

ボロボロの身体で何をしたつて結局変えられません。

「素に鉄。礎に石と契約の大公ーー」

いよいよサーヴァント召喚の儀が始まります。

おじさんの足元には大きな魔法陣。

それが呪文と共に輝き出します。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する

段々とおじさんの表情が苦しげに歪んでこきます。

「――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄る  
べに従い、この意、この理に従つなれば心えよ」

更に増していく輝き。

不意に私の頬を何かが流れていきます。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷  
く者。されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚  
われし者。我はその鎖を手繰る者　。汝三大の言靈を纏う七天、抑  
止の輪より来たれ、天秤の守り手よ　!!!」

私の視界は光に包まれやがて闇に染まっています。

闇の中には男性が一人片膝を地に着け臣下の礼をとる騎士の様に  
存在していました。

「ほう・・・召喚は成功のようじゃな。呵呵、そうでなければつまりん。  
雁夜よせいぜい頑張ることだ」

お祖父様は満足そうに頷いています。

肝心の雁夜おじさんは血反吐を吐いていました。

「ぐはっ・・・」

倒れそうなおじさんをサーヴァントが支えます。

確かに狂戦士のはずなんですが様子が少しおかしいです。  
着ている服装は現代でもありそうな紅いロングコート。

紅い帽子をかぶり、目は黄色いサングラスで隠していて身長は2m

くらごあつそつです。

「今回のマスターはすいぶんと人間らしい男のようだ。問おう、お前が私のマスターか？」

「そう……だ。絶対に、桜ちゃんを助けるんだ……絶対に」

おじさんは意識を失ったみたいです。  
おじさんを地面に寝かせるとサーヴァントは私を見つめます。  
暗がりでわかりにくいですが口元は少し笑っているように見えます。

「ほう……これは面白い、とても面白い」

ニヤニヤと唾つ Carter, vont.  
不快な顔。  
忘れたはずの感情とこつものが溢れてくる。  
——やめて。  
止まらない止まらない。  
——やめて。  
私の視界が滲む。  
——やめて!!

「フハハハっ！」

「ほう、バーサーカーの癖に理性を残しておるのか。桜に興味を持つのは構わんが手を出すのであればオヌシのマスターは死ぬことになるぞ？」

お祖父様はサーヴァントを睨みます。  
でもサーヴァントはあるで声が聞こえていないかのように私をた

だ見つめています。

「私は殺せる。微塵の躊躇も無く。一歩の後悔も無く廻殺できる。何故なら私は化物だからだ。ではお前はどうだお嬢さん。銃は私が構えよう。照準も私が定めよう。弾を弾倉に入れ、スライドを引け、安全装置も私が外そう。だが殺すのはお前の殺意だ。さあどうする？命令を!!」

サーヴァントはチラリとお祖父様を見ます。  
いけません、貴方はお祖父様の恐ろしさが分かっていないのです。  
逆らつたら・・・逆らつたら殺されてしまします!!

「サーヴァントの分際で儂を殺すと? 叩叩、愉快愉快。貴様のよつな者に儂が殺せると思つたか!?

「どうした? お前の一言でお前は助かる。それともこのまま豚のよつな悲鳴をあげて死んでいくのか?」

その言葉に私の中に微かに残っていたものが弾けました。

「あ たにーー貴方に何が分かるって言つんですか!!

「私には何もわからん。興味も無い。だが私のマスターがお前を助けると言つた。だからお前が望めば助けよう」

「今更・・・今更助けてくれるなんて虫の良い話があるわけがありません!!」

「桜・・ちやんは・・・絶対に・・・ま、もるんだ・・・」

激昂する私に聞こえてくる微かな声。

この家に来て初めて優しくしてくれた人。

私のせいであの優しこおじさんのが死んじゃつ。

私のせいで・・・。

滲む視界に[写る]雁夜おじさん。

ボロボロの雑巾みたいに横たわるおじさん。

薄れていった記憶が鮮明に[写]しだされる。

——久し振りだね桜ちゃん。

——今日は桜ちゃんとプレゼントがあるんだよ。

——可愛いな桜ちゃんは。

——絶対に守るからね、桜ちゃん。

——桜ちゃん、桜ちゃん、桜ちゃん。

「お願ひします・・・私とおじさんを助けて下れー!!」

心が熱い。

そうか、これが感情。

忘れていた、押し込めていた感情なんだ。

「了解だお嬢さん」

壁つサーヴァント。

わざとまでは嫌悪すら覚えたその笑みが今はとても頬もしく思え

た。

「桜——貴様後で覚えておけよ? 儂を怒りせぬといつなるか後で教育してやる」

お祖父様が怒っている。

——怖い。怖い。怖い。

「動くなよお嬢さん」

そう言つてサーヴァントが突然姿を変えました。

この世のものとは思えないそれは私の口から体内に侵入していくります。

けれど何故か不快ではありません。

むしろ温かい。

たくさんの命が私の中を温めてくれているようです。

「ふむ、これで終わりか」

再び口から出でてきたサーヴァントは元の姿に戻っています。  
そして懐から白銀と黒銀の一両の拳銃を取り出しました。

「呵呵、驚いたな。まさか桜の中の刻印蟲を全て取り除くとは。だが  
同時に貴様の中に蟲が入つたようじやな。樂には死なせぬ。苦しみ  
ながら死ね」

お祖父様が杖で床を突きます。

その音を聞くだけで私の身体は震えます。

あれはお祖父様が蟲を動かす時の合図。

きつとサーヴァントの中では蟲が暴れまわっているはずです。

なのに何故平然と笑っているのでしょうか。

「ビハーフ！」とじや・・・・貴様何をした!!

お祖父様の問を無視してサーヴァントは白銀の銃を発砲します。

それはお祖父様の足を貫くどころか吹き飛ばしていました。

当然お祖父様は床に倒れます。

でもこれくらいではお祖父様は死にません。

何故ならお祖父様はマキリの魔術師であり500年を生きる化物  
なのですから。

「いきなりとはな。だがその程度では死なぬよ」

何処からか蟲がお祖父様の足元に集まりそして足になりました。  
立ち上がるお祖父様を興味深そうに眺めるサーヴァント。  
そして今度は黒銀の銃を発砲しました。

心臓を貫いた弾丸は先ほどとは比べ物にならないほどにお祖父様  
の身体を抉り、大穴を開けていました。  
でもお祖父様は死にません。

やはり無理だつたんですね。

お祖父様を殺すことなんて。

「効かぬなあ。貴様程度では儂は殺せんよ」

「フハハハハハハハハハハハハ!!」

お祖父様は蟲を使ってサーヴァントの足元から食らいつきます。  
それを銃で潰して再びお祖父様の頭を吹き飛ばしますがやはり効  
果がないようです。

次から次へと生み出される蟲を躊し殺す姿はさすが英雄ですがで  
もお祖父様には勝てないのです。

なのにサーヴァントは笑っています。  
なにが面白いのでしょうか。

「楽しい!!こんなに楽しいのは久しぶりだ!! 貴様を分類A以上の化物  
と認識する」

手でカメラの形を作るようになると、白い手袋の甲に描かれた魔法  
陣が紅く光り出します。

次の瞬間サーヴァントの形が崩れたくさん瞳が目を開きました。  
そして中から突然銃が飛び出でお祖父様に発泡します。

連續して打ち出される弾丸を受けてお祖父様の身体がバラバラになってしまいます。

でもどれだけ粉々にしても蘇ります。

「なるほど、一〇一までくれば唯の化物か。まさか私の劣化コピーがこんな所にあるとはな。お前はまるで糞のような男だ。狗の糞になつてしまえ」

バラバラの状態から形を戻したお祖父様にとても大きな狗の顔が襲いかかります。

そしてそのままお祖父様に喰らいつき、碎き、飲み込んでしまいました。

「……終つたの？」

「ああ、終わつた、全て終わつた。改めて問おう、お前の名は？」

「桜・・・間桐桜」

「・・・桜。私はアーカード。バーサーカーのクラスで呼び出されたサーヴァントだ。お前は狗か？化物か？」

「私は・・・私は人間です。アーカード!!必ずおじさんを助けてください。できなかつたら私は貴方をどこまでも追いかけて殺します」

私の脅迫にアーカードは恍惚の笑みを浮かべています。  
心底嬉しそうで悲しそうで儂げで。

「ああ・・やはり人間は素晴らしい」

カーテンの隙間から月の光が差し込んでいます。

照らされるアーカードはとても美しく私は目を離すことが出来ませんでした。

そうして一夜が終わる。

この出会いは偶然か必然か。

全ての答えは聖杯の中に——。

name アーカード（グラード・シュペシュ、グラード・ドリュラキュラ）

クラス バーサーカー

筋力B+ 魔力E 耐久D 幸運E 敏捷B+ 宝具D+～EX

## 宝具

454カスールカスタムオートマチック ランクD+ 吸血鬼に  
対しては補正がかかりCになる

13mm拳銃ジャッカル ランクC+ 吸血鬼に  
対しては補正がかかりBになる

拘束術式開放第1～3号 ランクC～B++ ほほありとあらゆ  
る姿に変形变身できる。幻想種などの神聖系は不可

眷属セラス・ヴィクトリア ランクA+ セラスを召喚する。単独  
行動スキルAをもつが血を吸わずにいると徐々にステータスが下  
がっていく。

拘束術式開放第零号（死の河）ランクEX 全てを飲み込む死の  
河。ストックされた命全てをサーヴァントとして召喚する。結界系

ではないので街をそのまま飲み込む。範囲の設定は出来ない。また、吸収した命を全て放出するため、本体が殺されれば本体ごと全て消滅する。それぞれのサーヴァントは単独行動スキルAを持つ。

## 保有スキル

変身D 動物などに形を変える事ができる。

同化A 物や風景や生物と同化、すり抜けなどができる。日が出ていると制限されるものがある。

狂化B バーサーカー固有のスキル。吸血鬼であるため狂化しても言語を話すことができる。

吸血A 相手の血を吸うとその分命をストック出来る。既にとてつもない量のストックがあるためあまり意味は無い

再生EX 失った身体を再生させる。吸血で得た命分だけ死んでも蘇生する。ストックがとてつもない為ほぼ死がない。不死殺しの概念をもつた武器でも殺せない。治癒ではなく再生の為、治らない傷が出来ても死ねば元に戻る。例外は直視の魔眼のみ。

魅惑の魔眼E 目を合わせた人間を従わせる。魔術師やサーヴァントには効果がない。

吸血鬼 日に当たる場所だと身体能力全般が1ランク下がる。逆に満月だとワンランクアップ。

カリスマM 戦闘における統率・士気を司る天性の能力。吸血鬼化によつてほとんど失われてしまつたためほぼ無意味。一人か二人を上手く統率できる程度の能力。

千里眼 C 吸血鬼化による副産物。夜であれば更にワンランクアップ。

直感 A 人類を超えた感覚から生まれたもの。未来予知に近い。

#### 説明

15世紀のワラキア公国の君主。オスマン帝国からルーマニアを守った英雄。

別名 悪魔 吸血鬼 ドラキュラ ノーライフキング 伯爵 ナイトウォーカー

## 一瞬の平穏

深い、深い闇の中。

私という個が失われ溶けていく。

抜け出すことなどできるはずもありません。

だつてお祖父様の許しがないもの。

心臓を驚撃みにそれでいるような感触を感じて私は田を覚ました。

最悪の田覚め。

起きていても寝ていてもお祖父様に支配される。人形の私にはそれがお似合いことじだらう。

「お田覚めかなお嬢さん」

不意に壁から声が聞こえました。

見渡してみても誰もいません。

私はやっぱり完全に壊れています。

「田が覚めたのなら食堂まで来い。お前のおじさんはそこそこね」

「——っ!?

幻聴かと思つたそれはやはり誰かの声で私に食堂までここと言ひ。

お祖父様以外に魔術師はおじさんしかいないはず。

一体どうなつているんだらう。

ふらつく身体を奮い立たせて食堂に向かいます。

なんでこんなに身体が重いんだらう。

お祖父様に初めて蟲藏に入れられた時と同じくうご苦しい。

食堂に入るとおじさんがいました。

相変わらずの服装で私に微笑みかけます。

この人はなんで笑っているんでしょうか。  
今日もまたお祖父様に教育されるというの。』

「おはよう桜ちゃん。昨夜は良く寝むれたかい？」

「・・・」

いつもよりもテンションが高い雁夜おじさん。  
私と同じく狂ってしまったのでしょうか。

「でももう大丈夫だよ。俺のバーサーカーがあの臓窓をやつづけてくれたからね。だからもう祛える事はないんだ」

「えっ？」

ナニライツテルノ？  
オジイサマガシンド？

「気が早過ぎるのではないかマスター？あの怪物はまだ生きている」

「なつ!! それはどういうことだバーサーカー!! 終わったとさつき言つてたばかりじゃないか!!」

「——っ!!

食堂の壁から帽子が生えています。

壁と同化していたそれは、徐々に壁から抜け出て、手足が現れそして全体が浮かび上がります。

私はこれを見たことがある。

そう、昨日確かに見た。

彼はバーサーカー。

お祖父様を殺したサー・ヴァント。

「言葉通りだ。昨夜確かに全て終わった。だがあの怪物はあくまで虚像。仮の姿にすぎない。本体はお嬢さんの心臓と同化してしまって取り出す事はほぼ出来ない」

「なんだって……。けへしみじみまで桜ちゃんを苦しめれば気が済むんだ!!」

「そりでなければあの臆病者が私ヒヤヒヤおつむびとは思わんや。私がお嬢さんの中にあつた蟲を取り除いたことで焦りを感じ、襲いかつて来たのだろうな」

「けど奴が生きてるなら蟲を殺したって意味ないじゃないか!! 何が全て終わつただ!!」

雁夜おじさんが怒っています。  
他のだれでもない私の為に。  
最初は唯の馬鹿だと思った。  
でも今は違う。  
私の家族。  
たつた一人の家族なんです。  
だからそんなに怒らないでください。

「慌てるなマスター。取り除く事はできないが私の力で活動出来ないようにしてやつた。だからこそ終わったと言つた。この子が処女であればドラキュリーナにしてやっても良かったのだが非処女ではグールにしかならん。それはマスターの望むところではないだろう」

「それじゃあ桜ちゃんは大丈夫なんだな?」

「少なくとも私が残つている限つは大丈夫だ。だが戦争が終わり私が消えれば再び力を取り戻すだらつ」

「それじゃあ解決になつてないじゃないか!!」

聖杯戦争の期間は分かりませんがおじさんのおじさんの焦り方からそんなに長くはないんだと思います。

やつぱりお祖父様を殺すことなんて出来ないです。

「そつだな。だが方法はある」

「どんな方法なんだそれは」

「簡単なことだ。マスターの権利をお嬢さんに渡せば良い。幸い私自身の魔力貯蔵量は他のサーヴァントとは比較できないほどある。お嬢さんの魔力をほととぎ使わなくともこの戦争は乗りきれるだらつ」

「それだつたら俺でも良いくんじゃないか?」

「残念だがマスターの寿命はそつ長くはない。そしてお嬢さんから離れすぎると効果が薄れる。更にマスターの魔力では私を長く存命させること出来ない。もつと言えば桜の魔力はマスターの倍を遥かに超える。どのみちやらなければいけないのであれば今やつておくべきだ」

「桜ちゃんを巻き添えにするつていつのつか!!」

おじさんは私を守ると誓つてくれる。  
でも、おじさんはどんどん壊れていくのかよ。」「苦しい。」

「仕方あるまい。マスターが死んだ場合令呪は大聖杯に吸収される。そうなれば魔力の補給なしでの存命になる。いくら私でも1年程度しか持たない。つまりお嬢さんの平穏は1年だ」

「ぐつ、でも……」

「最悪人の血を啜れば存命期間は格段どころか100年は持つ。ただし他の人間は残らない」

私のせいで他の誰かが死ぬ。  
それは……できません。

「……桜ちゃんはどうしたい？」

「……私は」

出来るのであれば生きていきたい。  
でもそのために誰かが死ぬなんて……。  
無意識だったのだろう。  
気づけば私はリボンを触っていた。

「私は……私が戦います。おじさんの代わりに戦ってみせます」

「や、桜ちゃん」

意を決した私に驚く雁夜おじさん。  
頑張ります。  
だから少しでも長く生きてください。

「……めんよ桜ちゃん……俺は君を守れない……」

「大丈夫です雁夜おじさん。私は負けません。それに聖杯を手に入れれば願い事が叶うんですね。だったら私は雁夜おじさんが長く生きられるようにお願ひします。だから心配しないでください」

そんな悲しそうな顔をしないでおじさん。

大丈夫だから。

私は大丈夫だから。

「絶対に・・・死なないでくれ。桜ちゃんが死んだら葵さんや凜ちゃんに顔向けできない」

「・・・」

私がかつて居た場所。

楽しかった場所。

おじさんはあそこに戻すと言つていたけど、私は帰りたくない。  
私はおじさんと一緒にここで暮らしたい。  
だからおじさん死んじゃダメだよ。

「それじゃあ令呪を移すね」

私の左手の甲に刻まれる令呪。

痛いのは嫌なはずなのに今はどこか心地良い。

次に襲ってきたのは私の中の魔力が流れしていく感覚。

はつきりと分かる。

そこに存在する者と繋がっている。

「これでおしまい。秘密裏に令呪について調べておいてよかつた」

「ありがとうございます雁夜おじさん」

「俺はありがとうなんて言われる資格はないよ・・・無力で馬鹿な男なんだか」

「ううん。おじさんは私のために傷ついてくれた。私のたつた一人の家族になつてくれた。だから今度は私がおじさんに返す番。待つて。必ず聖杯を手に入れてくるから」

私は笑う。

おじさんが安心出来るようだ。

今はまだ醜い笑みかもしれないけど。

おじさんと一緒にいれば必ず心から笑えると思う。

だから今は今できる最高の笑顔をおじさんにあげたい。

「うん、待ってるよ。だから辛くなつたら俺に相談してくれ。必ず桜ちゃんの役に立つてみせるから」

そう言つておじさんも微笑む。

私は汚くて醜いけどそれでも良い。

だつておじさんはそんな私にも微笑んでくれるから。

「何を一ヤ一ヤしているんですか。やつぱりこつなる事も予想済で昨夜全て終わつたと言つたんですね」

「そのとおりだ新たなマスター」

「食えない人ですね・・・人で合っていますか？」

私の間に一層笑みを深めるバーサーカー。  
やはり私は貴方が苦手です。

「私は人間ではない化物だ。簡単に言えば吸血鬼だ」

「そりゃあさうだリキューナとか言つてたな・・まあかお前の  
真名つて・・・」

「そのとおりだ人間」

バーサーカーが窓の外に手を伸ばす。

すると遠くから何かが地面に落ちる音がした。

「使い魔・・・ではないな単純な機械のようだ。どうやら魔術師以外の  
人間も混じっているらしい」

「やはつ他のマスター達も早速動き出してるな。間桐、遠坂、AINツ  
ベルンは御三家だから面場所なんて既にバレてるだろつし、ここも危  
ないかな」

「問題ない。こいつは既に私の領域だ。ミサイルが飛んでこいつとも問  
題はない」

「・・・恐ろしいなお前」

「貴様のような半端者が呼んだのだから当然半端者の化物に決つてい  
るだろ」

やはり楽しそうだ。

彼はこの戦争を楽しんでいるように見える。  
さすがは鬼と言つたところでしょうが。

「今更ですけど私は貴方を何と呼べば良いですか？」

「アーカード。アーカードとお呼びくださいマイマスター」

「それじゃアーカード。貴方は聖杯に何を望むの？」

「何も望まない。ただ、化物は人間によつて倒されなければならぬ。  
だからこそ私は聖杯の呼びかけに応じた」

彼の言つていることの矛盾。

望まないのに倒されることを望む。

しかし倒されたからこそ彼はここにいるのではないか。

過去に倒され死んだからこそ英靈になつたのではないか。

「不思議そうな顔をしているな。ならば答えよう。私は死んでなどい  
ない。死ぬ前に聖杯によつて呼び出されたからだ」

「そうですか。よく分かりませんがでも私がマスターである限りは負  
けは許しません。絶対にです」

「そのオーダーを認証した。全力で戦う事を約束しよう

「なら良いです」

私がそういう時お腹からぐうううと音がなつた。

・・・そういうえば昨日から何も食べていませんでした。

「ははは、それじゃご飯を作るから桜ひちゃんは待つてね

雁夜おじさんがキッチンへと歩いていきます。  
顔が熱いです。

「あの・・・アーカードは食べないんですか？」

「私は後で食事をしに行く。マスターは今のうちに食事を済ませておけ」

「アーカードはどうかに出かけるんですか？まだ日が出ていますが・・・」

「私にとって日の光は大敵ではない大嫌いなだけだ」

アーカード

「そ、そうですか」

「もちろんマスターも一緒に行くのだから食事を済ませたら直ぐに再度をしてくれ」

「わかりました」

「出来たよ。さあ食べよう」

一度雁夜おじさんが朝食を作り終えたようです。  
テーブルに並べられたパンと牛乳。  
パンの上には玉焼きが乗っています。

「めんよ、こんなものしかなかつたんだ。せめてジャムだけでもあればよかつたんだけど」

「いいえ、私はこれで十分です」

思っていたよりも静かに流れていく食事ですがたまらなく愛おしく感じます。

私はどうなつてしまつたのでしょうか。

たつた一日でこんなにも心が揺れ動く。  
捨てたはずのものが際限なく溢れてくる。

これが夢なら覚めないでください。  
この中であれば私は頑張れるから。

朝の食卓は味気ないものでも良い。

私にとつては最高に幸せで狂おしい毎日の日常がいいあるんです  
すから。

name 間桐桜（まとうざくら）

マスター

元遠坂桜。

娘の幸せを願つて父の遠坂時臣によつて間桐に養子に出される。  
だが実際は教育という虐待を受け続け、更に間桐の魔術に無理やり  
合わせた為髪の色が変わつてしまつた。

本来の属性は「架空元素・虚数」と呼ばれる属性で、魔術師による  
庇護がなければ引き寄せてしまう怪異によつて桜と周囲に危害が及  
んでしまう。それ故養子に出された。

原作では常に日陰で虜められている存在。

人気投票でもメインヒロインなのに他のキャラに負ける始末。  
でも作者は好きです。

name 間桐雁夜

元マスター

間桐家の魔術を嫌つて家を飛び出しだが、想い人である禪城葵（遠  
坂葵）の娘である間桐桜が魔術訓練のため蟲による調教を受けてるこ  
とを知り、11年の歳月を経て間桐家に戻ってきた。

しかし、臓覗に植えられた刻印蟲によつて寿命は縮み、もつて1ヶ月。バーサーカーとの契約で更に縮んだ模様。

原作ではキャスターに並ぶ最高の噛ませ犬。  
負をまき散らすだけのダークヒーローになりきれなかつた人。  
だけど愛されてるおじさん。

name 監視ロボ?  
機械

間桐邸に侵入して即撃退されたロボ。

## 偶然と必然の出会い

食事を済ませて私とアーカードは街へと向かいました。  
聖杯戦争とは言つても口中は平和そのものです。

魔術は衆目に晒してはいけない。

これは魔術師全てに共通の認識らしいので人が多い口中に戦うなんて馬鹿な真似はしないと思います。

ただ、魔術以外の方法で暗殺される可能性も零ではないので警戒はします。

「どうした桜。そんなにビクついていては戦争に生き残れないぞ」

アーカードはいつも私を試すような、馬鹿にするような口調です。  
吸血鬼がどんな事を考えているかなんて知りませんがかなり気分が良いものではありません。

「大きなお世話です。それよりも、さつき聖杯戦争について色々知っているような口ぶりでしたけど何故あんなにも詳しく知っていたんですか？」

「ふつ、我々サーヴァントはこの世界に召喚された際に現代の知識や簡単な聖杯戦争のルールなどを予め聖杯から与えられる。そして雁夜の家は御三家の中でも令呪のシステムの作り上げた家で令呪関係などの文献などが残っていた。厳重に封印されていたそれを読んだだけだ」

「そんなものが間桐の家にあつたなんて・・・」

「臆病者なだけあつて子孫や後継者にすら教えるつもりはなかつたのだろ？」

「ならどうしてそんな文献を残したんでしょうか？」

「大方あの身体を維持していくのに魂が削れていったのだろう。故に忘れてしまつ前に文献にして残して置いたのだろうな」

「・・・はあ、なんであんな馬鹿の為に僕が本を買ってこなくちゃいけないんだよ・・・」

偶然視界の端に写つた人物は本屋でため息を吐きつつ戦闘機の本？を次々とカートに入れていました。

小さな本屋のドアが偶然開いていたので田に止まつたのですが、あの人は軍事マニアか何かでしょうか。

「つたぐ、あいつサー・ヴァントの癖に現代兵器なんて見てどうするんだよ・・・」

その言葉に私の身体が強張ります。

——あの人マスターだ。

どうしましょう。

見たところ怖い人には見えませんが・・・。

「おいクソガキ・・・お前マスターだらう？」

どうしようか迷つてゐる私の氣も知らずにアーカードは堂々と問いかけてます。

もしかするとこの人は・・・馬鹿なんでしょうか。

「え・・・ええええええ！」

話しかけた男性はすぐ驚いています。

黒いオカツパ頭に黒に少し縁が入ったような瞳が特徴的です。  
何よりも・・・可愛い。

男性に可愛いといつものでは無いかもしませんがとにかく可愛い  
いです。

拳動の一つ一つが妙に面白くてつい笑ってしまいました。

「くわくわ」

「えつえつえつ？」

未だ動転している様子も可愛いてなんだかホッとしています。  
やつぱり怖い人じゃないみたいですね。

「ごめんなさい面白くて」

「面白いつてなあ・・・まあいいけど」

照れた顔も・・・いえこれ以上はやめておきます。  
細い身体に加えて身長も・・・男性の平均身長からすると少し低い  
かもしだれません。

「それよりも、マスターってことはお前たちも参加者ってことか・・・  
もしかして、サーヴァント？」

アーカードを揃えています。

私が頷くと後ずさるのように数歩下がりました。

「ま、まさかここで始めるつもりじゃないだろうな・・・」

「いえ、そのつもりはありません。でも少しだけお話ししませんか？」

「アーカードにて四駆せあると彼は頷きました。

「うーん、分かったよ。」さればいつから少し待つてくれるかい？」

「はい、分かつました」

「はあ、つこてなこや・・・」

とぼとぼと店内に入つてきました。

「アーカードはもう少し配慮してくだせー」

「ふつ」

なるほど従つてしまは無いつてことですか。

「おまたせ。近くに公園があるから場所を移そう」

着いて行くと小さな公園がありました。

周りはマンションに囲まれていてシーソーとフランバゴとベンチが置かれています。

男性は迷わずベンチに座ると手招きをしてきます。  
男性の隣にはハンカチが置かれていてここに座れと言つことで

しうつか。

「いいのベンチなんでこそこなにも汚いんだよ。」めんねこんな汚いといひで」

「いえ・・・でもハンカチはいいんですか？」

「ああ、構わないよ。イギリス紳士としてのたしなみや。」

得意気に話すことの人は格好をつけても様にならないですね。  
・・・私なんだかどんどん悪い子になつて来てるような気がします。

「ふう、さて話なんだけど・・・君がマスターで間違いない？」

「・・・はいそうです」

「瞬迷いましたけど正直に答えました。

「君みたいな小さなことじもがねえ・・・何か事情でもあるの？」

「はい、私には叶えないといけない願いがありますから」

「一応聞いとくけど根源関係ではないんだよね？」

「・・・はい」

「詳しく述べは聞かないけどきっと大事なことなんだよね・・・それに比べて僕は・・・はあ」

「なんで落ち込んでいるんでしょうか。

アーカードは興味がないみたいで少し離れた木にもたれかかっています。

「あの、お兄さんの願い事はなんですか？」

「む・・・僕の願い事は他の人に僕の事を認めさせること。正しく評価されたいんだ」

「そう、なんですか

「この聖杯戦争に参加したのだって先生を見返したかったからだ  
し・・・ああもう!!こんな子どもに愚痴るなんて!!しかも僕よりしつ  
かりしてると!!自分が嫌になつてくる!!

髪の毛を搔きむしり声を上げるお兄さん。

私には理解できませんがお兄さんは耐えられないんでしょう。  
やがて落ち着いたお兄さんは意を決したように立ち上りました。

「よし、決めた!!僕が生き残つたら君の願いを代わりに叶えてあげる  
よ!!」

「でも私はお兄さんを殺してしまつかもしません」

「・・・その時はその時だよ。僕だって手は抜かないからな。だからお  
互いがんばるわ」

「はい。絶対に負けません」

そして一時間ほど話した後お兄さんが慌てて立ち上りました。

「やばい、あいつが家から出でてくる!!へそ、あいついい加減にしるよな  
!!大人しく家でゲームでもしてろよ!!・・・『めん帰るね』

去り際に『僕の名前はウェイバー・ベルベットだ』と言つたので私  
も『桜です』と返してウェイバーさんと別れました。  
やつぱりウェイバーさんは可愛いです。

「ようやく終わったか桜。ならば食事に行くぞ。私はもう限界だ」

「お待たせしました。それでどこに行くんですか？」

「病院だ」

「病院？」

冬木にある一番大きな病院に到着すると私を椅子に座らせて『待つていろ』と言つて歩いていきました。

受付の看護師さんに『何も問題はない』と繰り返し呟いていましたがあれは何でしょうか。

謎ばかりです。

通り過ぎて行く人たちを眺めながら待つこと30分ほどでアーカードは戻ってきました。

若干血の匂いがしますが気にしない事にします。

「満足しましたか？」

「ああ満足だ、とても満足だ、とてもとても満足だ」

人類ではありえない尖った犬歯をむき出しにしているアーカードはやはり吸血鬼なのですね。

「では帰ろつかマスター」

帰り道、私はいくつかの視線を感じました。

特にすれ違つた黒髪の女性はとても鋭い視線を向けて来ました。きつと聖杯戦争関係者なのでしょう。

でも隣にアーカードがいるので怖くはありません。

まだまだ口は沈みませんがまずは帰つて雁夜おじさんを安心させてあげましょう。

偶然の出会いなんて事がありましたがとても楽しい一日でした。  
それだけは間違いありません。

青く澄み切った空を睨みながら私はそう思いました——。

name ウェイバー・ベルベット (Waver Velvet)  
マスター

魔術師としては3代目になるが実力は・・・。

魔術師は血統だけではないという論文を教師である男に提出するも馬鹿にされた。

その腹いせにその教師宛の聖遺物（英靈が生前持っていたとされるもの）を盗み、それを使ってマスターとなる。

自信家でナルシストの癖に臆病で、身長が低いことを気にしている。

聖杯で求めるのは馬鹿にした人々に自分の価値を認めさせる」と。しかし彼のサーヴァントに「小さい」と言われ、落ち込んでしまう。

原作でのメインヒロイン。

もはや主人公とか騎士王とか金ピカとかよりも目立つほどのキャラ。主人公よりも主人公をしていたキャラ。

唯一4次で生き残った人物。

後に時計塔の講師として頭角を現す。

今作では目標を印えてあげたので若干男らしいかもしません。  
また、アーカードのステータスを読み取っていますが日中のため低いステータスで覚えていきます。

作者がzeroで一番好きなキャラです。

name 久宇 舞弥（ひやつ まいや）

協力者

武器はステアーAHGとキャリルM950。幼少から兵士となる為に訓練を受けており、切嗣に拾われるまで桜と似たような境遇にあった。

実は出産経験もあるらしい（もちろん望んだものではない）。実は甘党。

純真無垢で一途。

とあるマスターと愛人関係にある。

原作ではそこまで重要な登場人物ではない。この作品では重要人物にしたいな。

## 闇と黄金の邂逅

月の光と街灯によつて写しだされる2つの影。  
それは時に交じり合い時に離れ時に睨み合つ。  
振り下ろされる武器を長い槍で受け止め逸し反撃とばかりに突き  
出す。

私の眼前には神話でしか許されない戦いが繰り広げられています。

一人は金色の髪の騎士。

外見は美しく華奢な少女ですがブルーのドレスに銀の鎧を纏つて  
います。

襲いかかる2本の槍を見えない何かで弾いています。

もう一人は泣きホクロが特徴の黒髪の男性。

2本の槍を駆使して何度も攻め立てます。

私の目には捉えられないほどの速度で進行していく戦いに呆けて  
しまいそうになります。

しかし、目をそらす事は出来ません。

現在私はコンテナの影に隠れてそれを見ています。  
突然アーカードに連れられて来た時は驚きましたが、今のうちに慣  
れておけということでしょうか。

あれだけ動いても汗一つかないのとはさすが英靈です。

私にこれを見ておけと言う割にアーカード本人は闇に溶け込んで  
消えてしましました。

なので今私は一人です。

「じゃあいはそこまでだランサー」

「ランサーのマスター!?」

「これ以上勝負を長引かせるな。そのセイバーは難敵だ。速やかに始末しろ。宝具の開帳を許す」

「じこからか声がします。

やけに偉そうな口ぶりですが様子からあの槍使いのマスターの声みたいですね。

透明の武器を持ったサーヴァントのマスターらしき白髪の女性の身体がビクッと震えています。

宝具については多少話は聞きましたがよくわからなかつたのでどんなものか見せていただきましょひ。

「了解した我が主よ」

勿体つけたように言つと槍使いは持っていた短槍を地面上に落とし長槍を両手で持ちます。

すると槍に巻きつけてあつた布が解かれ、紅い槍が顔を出します。禍々しい妖氣を発しているあれが宝具のよひです。

「そういうわけだ。ここから先は獲りに行かせてもらひ。セイバーお前は束ねた風の魔力で剣を隠したままか?」

セイバーと呼ばれたサーヴァントは僅かに力が入ります。

「なるほど、剣を覆い隠しておきたい理由がお前にはあるということか。お前の真名、その剣にあるとみた」

「残念だなランサー。貴殿が我が宝剣の正体を知ることはない。その前に勝負を決めて見せる」

セイバーは剣を構えました。

それに合わせてランサーが歩き出しました。

「それはどうかな？見えない剣を暴かせて貰うぞ、セイバー」

身体の重心を落とすと一瞬で距離を詰めてセイバーに槍を突き出しました。

爆音を風と共に透明だった剣から黄金の光が溢れでています。

「晒したな、秘蔵の剣を・・・」

「インヴィジブル・エアが解れた・・・」

ランサーは足元に槍を突き刺し、次々と攻撃をつなげていきます。  
それをセイバーは躊躇し、弾きます。

コンテナ側に追い詰められたセイバーはコンテナを駆け上がり反転します。

二人の立ち位置が丁度反対になりました。

「刃渡りも確かに見て取った。これで見えぬ間合いで惑わされる」と  
はない

走りだすランサーに対してセイバーは動きません。  
目を閉じてじっと何かを考えているみたいです。

そして田をあげると剣を頭の上で構えて走りだしました。

「――っ!!」

私の予想を大きく外れてセイバーは脇腹辺りを刺されました。  
掠つただけですが血が滲みでています。

「セイバー!!」

「ありがとうございます、アイリスフィール。大丈夫治癒は効いています」

一瞬光つたのは治癒らしいです。  
とても興味深いです。

「やはりやすやすと勝ちを獲らせてはくれんか」

心なしかセイバーの顔に焦りが見えます。  
貫かれた鎧の位置に手を当てていますが、どうしたのでしょうか?  
手を離した場所をじっと見てみると鎧に傷がついていません。

「そうか、その槍の秘密が見えてきたぞフンサー」

「ほう」

「その紅い槍は魔力を断つのだな?」

「ふつ、その甲冑は魔力で生成されたもの。それを頼みにしていたの  
なら諦めるのだな、セイバー。俺の槍の前では丸裸も同然だ。」

「たかだか鎧を剥いだぐらいで得意になつてもうつては困る

そう言つてセイバーは鎧を脱ぎ捨てました。

なるほど。

確かに鎧があつてもなくとも変わらないのであれば少しでも軽く  
したほうが戦い易いでしょう。

「防ぎ得ぬ槍ならば、防ぐより先に斬るまでの事。覚悟してもらおう、

「ランサー」

「思い切ったものだな。乾坤一擲(けんこんいつてき)ときたか。鎧を奪われた不利を鎧を捨てるとの利点で覆す。その勇敢さ、潔い決断。決して嫌いでは無いがな。この場に言わせてもらえればそれは失策だったぞ、セイバー」

「さて、じつだか。甘言は次の打ち込みを受けてからこにしてもらおうか」

セイバーは剣によつて生じた風を使って水平に跳躍しました。  
襲い来るセイバーを嘲笑う様にランサーは足元にあつた槍を足で蹴り上げ、空いていた手で握りしめました。

それを振り、セイバーの手首を斬り裂きました。

同時に短槍を持っていた手の手首を斬られ、槍を落としました。

「つづくすんなりとは勝たせてくれんのか。良いがなその不屈ぶりは」

「何を悠長な事を言つてこる。馬鹿め。仕留め損ねおつて」

斬られたランサーの手首の傷が消えました。  
サーヴァントの回復はマスターなら出来るのかもしませんね。  
・・・私はやり方が分かりませんけど。

「痛み入る、我が主よ」

「アイリスフィール、私にも治癒を」

「・・・かけたわ。かけたのに・・・そんな!! 治癒は間違いなく効いているはずよ。セイバー貴方は今の状態で完治しているはずなのつ

「我がゲイ・ジャルグを前にして鎧が無意だと悟つたまでは良かつたな・・・が、鎧を捨てたのは早計だった」

地面上に落ちた黄色い短槍を蹴りあげて再び握り、ドヤ顔です。

「やつでなければゲイ・ボウは防げていたものを」

「なるほど、一度穿てばその傷を決して癒やせぬところ呪いの槍……もつと早くアタフツくべきだつた。魔を断つ赤槍。呪いの黄槍。加えて、乙女を惑わす右田の泣き黒子。フィオナ騎士団随一の戦士。輝く貌のティルムッシュ。まさか手合させの末に預かるとは思ひませんでした」

「それがこの聖杯戦争の真であるひつな。だがな、薦高いのは俺の方だ。時空を超えて英靈の座に招かれたものならばその黄金の玉剣を見違えはせん。かの名高き騎士王と鎧迫り合つて一矢報いるまで至つたとは・・・ふふふ、じつやいらの俺も捨てたものではなこりしこ」と

騎士王?

誰のことでしょうつか・・・。

女性の騎士で王・・・?

帰つたら調べてみようかな。

「わて、互いの名も知れた所で、よつやく騎士として尋常なる勝負に挑めるわけだが・・・それとも、片腕を奪われたままでは不満かなセイバー?」

挑発するランサーに答えるようにセイバーは鎧を纏いました。  
剣を正面に構えて、ギシッとしたランサーを睨みます。

「戯言を・・・」の程度の手傷に気兼ねされたのではむしろ屈辱だ

「覚悟しろセイバー。次こそは獲る!!」

「それは私に獲られなかつた時の話だぞ、ランサー!!」

お互い一步も引かない状態。

好敵手同士の譲れない戦いに私は汗ばんだ手を握りしめます。

しかし呼吸をするのも躊躇われる状態のこの場に突如として雷が落ちました。

私は驚いて腰を抜かしてしまいました。

「アーララララライイイイイイイ!!!」

轟音と雷の中、二頭の牛に引かれた牛車？に乗つた大男がセイバーとランサーの間に割り込みました。

赤いマントに赤い髪に赤い髭。

全身はとてもない筋肉で覆われています。

その男が両手を広げました。

「双方剣を治めよ。王の前であるぞ」

チラツチラツツセイバーとランサーを見て目を閉じました。

「我が名は征服王イスカンダル!!此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

これはどう反応すれば良いのでしょうか・・・。

セイバーもランサーも呆れた顔です。

一緒に乗つているオカツパ頭の・・・ウェイバーさんは焦りと怒りで凄い顔をしています。

可愛い顔が台無しです。

「何を考へてやがりますか!!」の馬鹿は!!」

ウエイバーさんは泣きながら大男の服に掴みかかりましたが『デコピンで弾き飛ばされました。

「いでつ!!」

額を抑えて泣く姿は・・・ふふふ。

「うぬりとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが、まずは問いつておくことがある。うぬり・・・一つ我が軍門に下り聖杯を

余に譲る気はないか!! さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦を共に分かちあう所存である

ランサーは『こいつ馬鹿だ』と首を振った。

「その提案には承諾しかねる。俺が聖杯を捧げるのは今生にて誓いを交わした新たなる君主ただ一人だけ。断じて貴様ではないぞライダー!!」

セイバーも呆れた様にため息を付いています。

「そもそも、そんな戯言を並び立てるために貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたと言つのか? 騎士として許しがたい侮辱だ!!」

セイバーの怒りを受けてもライダーと呼ばれる大男は耳を指で搔いていました。

・・・この人は好きになれそうにありません。

自分勝手で周りに迷惑をかける事に戸惑いすら見られません。  
こんな人がいるから私のような人が増えるんです。

私の中の暗く嫌な感情が沸々と湧き上がつていきます。

「待遇は応相談だが?」

指でお金の形を作っています。

・・・。

「「ベビーッ!!

セイバーとランサーの声が重なりました。  
残念だと「」の作った指を見てします。

「重ねて言つなら私も一人の王としてブリテン国を預かる身だ。如何  
な大王といえど臣下に下るわけには行かぬ」

ぎゅっと剣を握りしめたセイバー。

「ほう、ブリテンの王とな?」いや驚いた。名にし騎士王がこんな小  
娘だったとは!!」

セイバーは唇を噛み締めています。

飛び出してライダーを怒鳴りつけたい衝動に駆られましたが、せつ  
かくアーカードが結界?を張ってくれたのが無駄になってしまいま  
す。

「こは我慢しないと。

「その小娘の一太刀を浴びてみるか、征服王!!」

「はあ・・・」りや交渉決裂か。勿体無いなあ。残念だなあ

「——ライダー!!!」

ウェイバーさんが叫びました。

「大体お前は——」

「そ、うか。よ、りによつて貴様か。一、体何を血迷つて私の聖遺物を盗み出、したのかと思つてみればまさか君自らが聖杯戦争に参加する腹だつたとはね。ウェイバー・ベルベット君」

ウェイバーさんは怯えてライダーにすがりついています。  
この声の人物を知つていいようですね。

「君については私が特別に課外授業を受け持つてあげようではないか。魔術師同士が殺しあうという本当の意味。その恐怖と苦痛を余すこと無く教えてあげよう。光榮に思い給え」

ウェイバーさんは耳を塞いで縮こまつてしましました。  
ウェイバーさんを脅すなんて・・・許しません。

そんなウェイバーさんの肩を叩き、ライダーは叫びました。

「お、う、魔術師よ!! 察するに貴様はこの坊主に成り代わつて余のマスターになる腹だつたらしいな。だとしたら片腹痛いの。余のマスターたるべき男は余とともに戦場を馳せる勇者でなければならぬ!!  
姿を晒す度胸さえ無い臆病者など役者不足も甚だしいぞ!!」

そう言つて大笑いしました。

馬鹿だと思つていましたが良いこと言つひじやないですか。  
少しだけ見直しました。

「おじいじ!! 他にもおるだらうが!! 間に紛れて覗き見ておる連中は  
!!」

「ビリビリ」とだライダー?」

私の心臓が跳ね上がりました。  
バレてる!!  
まずいです。まずいです。  
アーカードもこなこのビリビリよつ!!

「セイバー、それにランカーよ。ウヌらの真っ向切っての競い合いで。  
誠に見事であった!! あれほど清澄な剣戟を響かせては惹かれて出て  
きた英靈がよもや余一人とこいつとはあるまじて」

腕を振り上げてぎゅっと握るとライダーは宣言しました。

「聖杯に招かれし英靈は今ここに集うがいい!! なおも顔見世を怖じる  
よつな臆病者は征服王イスカンダルの侮蔑を免れぬものと知れ!!」

響く轟音。

これは出て行くしか……ないんでしょうか。  
足元を見てみると眼が私を見ていました。  
行けと言つんですねアーカード。

分かりました。

私は絶対に勝ちます。

雁夜おじさんの為に。

踏み出す一步。

身体が月の光を浴びて色を成します。

私と同時に街灯の上に黄金のサーヴァントが出現しました。  
むづくつと顔を上げた黄金のサーヴァントは不機嫌な顔をしてい  
ます。

「俺を差し置いて王を称する不埒者が一夜に2匹も湧くとはな」

「難癖着けられたところでなあ・・・イスカンダルたる余は世に知れ渡る征服王にほかならぬのだが」

「戯け。真の王たる英雄は天上天下に我ただ一人。後は有象無象の雑種にすぎん」

「そこまで言つならまづは名乗りをあげたらどうだ? 貴様も王たるものならばまさか己の偉名を憚りはすまい」

「問を投げるか、雑種風情が。王たるこの我に向けて。我が配列の衆に欲してなおこの面貌を見知らぬと申すならそんな蒙昧は活かしておく価値すら無い!!」

黄金のサーヴァントの背後が揺らぎ、波紋が広がると武器らしきものが幾つか出てきました。

黄金のサーヴァントが街灯を踏みつけると光は失われました。

「あ・・・」

思わず声をあげてしまいました。

小さな声だつたはずですが全員が一斉に私の方へ顔を向けてきました。足がすくみそうです。

特にあの黄金のサーヴァントは武器をしまつ素振りすら向げず、見下ろしてきます。

怖い。

全員が私の登場に困惑しているように見えます。

「なつ!! 子どもが何故こんな所に!!」

「くつ、不味いな・・・」

「不味いのあ・・・」

「あ、桜・・・?」

「何だ坊主、知り合いか?」

「ああ・・・「つご」

やはり私のような子どもがこの場にいるのが不思議でならないようですね。

私自身場違いなのはわかっています。  
でも私は逃げたくありません。

「ふん、誰かと思つてみれば薄汚れた雌狗ではないか。・・・貴様、誰の許しを得て俺を仰ぎ見る? 分を弁えよ雑種!!」

矛先が私に向きました。

そして放たれる容赦の無い一撃。

私ではあれを躱すこのなんてできません。  
ここで終わるの?

何も得ず、何も与えられず、何も出来ないまま終わっちゃうの?  
・・・許しません。

こんな私にしたお父様も、お祖父様も・・・神様も。  
私は絶対に許しません。

こんな下らないつまらない無駄な人生は・・・ハロ・シテシマ・イマ・ショウ  
ウ。

「来なさい、アーカード」

私の呼びかけに応じるように影から現れる真紅の鬼。  
人類を遥かに超越した不死者。

ノーライフキング。

私の絶対にして唯一の力。

放たれた剣から私を守るように間に立つアーカード。  
その顔は絶望ではなく笑み。

凶悪な笑み。

見せてあげましょう。

私達の憎しみを。

剣がアーカードに突き刺さりました。

吹き出す血。

真紅のコードが更に紅く染まっていきます。

私以外の全員が畳然と見ていてます。

普通であれば致命的なダメージ。

そのまま消えることでしょう。

でも、彼はアーカードに普通は当てはまりません。

「ほう

「バーサーカー!?」

黄金のサーヴァントの目が細められました。  
面白いものを見つけたと言わんばかりに。

セイバーは何処からともなく現れたアーカードに驚いているよう  
です。

「な・・・」

「ビーナンビーおおの・・・」

「なんで消えないんだ!?」

「フフフフハハハハハハハハハッ!!!」

鬼が嗤う。  
心底嬉しそう。

「・・・初めまして黄金の王。そしてさよならだ。貴様は私の主を雌狗と呼んだ。お前生きてここから帰れると思つなよ・・・ぶち殺すぞサー ヴァント!!」

アーカードが懐から拳銃を抜きました。

白銀と黒銀の美しい拳銃。

それらは確かに殺意を持つて黄金のサーヴァントを狙います。

「貴様、俺に向かつてその戯言——そこまで死に急ぐか狗!!」

私達に向けられる恐ろしい数の武器。

一つとして同じものはありません。

ですが一つ一つが必殺の武器である事は間違いありません。

先に動いたのは黄金のサーヴァント。

何本もの武器が襲いかかります。

アーカードはそれを的確に撃ち落とします。

「やつめ・・・本当にバーサーカーか?」

「狂化して理性を失つて・・・おらんのか? だがバーサーカーにしてはえらく芸達者なやつよのぉ」

「セイバー・・・あれだけの傷を負つて現界したままでいられるの?」

「いえ・・・あれはあります。あれほど深いキズを負えば消滅するはずです。おそらく特殊な宝具を所有している可能性が高い。あのサーヴァントは最低でも3つは宝具をもっています。ですがあの黄金のサーヴァントも・・・」

「ええ、あの武器は全部宝具のようね・・・認めたくはないけれど。やつかいなサーヴァントが増えたってことね」

「ちい、狂狗風情が我の攻撃を防ぐだと!!」

攻撃が弱まつた隙にアーカードの黒銀の銃が街灯に向けられました。

金属と金属がぶつかり合ひ甲高い音を立てて街灯は真つ一本になりました。

黄金のサーヴァントは飛び上がり、危なげもなく地に降り立ちました。

「・・・痴れ者が、天に仰ぎ見るべき」の俺を一一同じ大地に立たせるかっ!! その不敬は万死に値する!! そこな雑種よ。もはや肉片一つも残さぬぞ!!」

展開される必殺武器の数々。  
アーカードはそれすら愉しむよつこ體づ。

「一一つ!! 貴様」ときの宣言で王たる我に退けと? 大きく出たな・・・

時臣

「ヒモ……おみ」

黄金のサーヴァントが手をふると向けられた武器は消えました。  
退くところとでしょつか。

私はそのことに安心しましたがそれ以上にあのサーヴァントが  
言った言葉に動搖していました。

時臣。

それは私がこの世で2番めに嫌いな人物。

縁を切った怨敵。

言葉から察するにあのサーヴァントのマスターのようです。  
だとすればあのサーヴァントは許しません。  
いつの間にか私は歯を噛み締めていたようです。  
落ち着かなければいけませんね。

「命拾いしたな狂狗……。雑種共、次までに有象無象を聞引いておけ。  
我と見（まみ）えるのは真の英雄のみで良い」

それだけ言って消えて生きました。

「ひつむ……ビツヤーあれのマスターはアーチャー血筋ほび豪気な質  
では無かつたようだな」

ライダーが終わつたとばかりにため息をつきます。  
アーカードは逃げていつた黄金のサーヴァント——アーチャーが  
去つたことで興味の対象がセイバーへと変わつたようです。  
じつと紅い瞳でセイバーを見つめています。

「……バーサーカーで間違ひはないか？」

セイバーが警戒しながらこちらを見ていました。

アーカードはそれには答えず私を見ます。

「桜、オーダーを寄越せ」

「・・・全部消して。私達を邪魔するあつとあらゆるものを見つけて壊して

「フフフッ、そつだそれでこそ我が主だ。なりば打つて出るが、とくと  
ご覧あれ。桜」

私の命令（オーダー）を待っていたと鬼は言つ。

私は震えた。

この頼もしい吸血鬼を美しいと感じてしまったから。

夜はまだまだ続きそうです。

目指すは目の前の敵。

今はそれだけを考えましょう。

## 不死者

長い夜が始まりました。

アーカードは警戒することもなく悠然と3人のサーヴァントに向かっていきます。

アーカードの傷は既になくなっているようです。

足取りもしつかりしているので全快したのでしょうか。

黄色いサングラスを外して銃を持つ手に力が入りました。いよいよ始まるんですね。

「なあ征服王・・・あいつには誘いはかけんのか？」

「誘おうにもなあ・・・あればのつけから交渉の余地が無さそうだわなあ」

冗談を交わしているランサーとライダーにアーカードは一丁ずつ拳銃を構えました。

そして容赦なく発泡しました。

バンッと渴いた音が響きます。

人間であれば避けることが出来ない銃弾。

ですが彼等はサーヴァントです。

危なげでしたがキツチリと躲しました。

それに合わせてセイバーが走り出します。

アーカードも釣られて走りだしました。

アーカードによる銃弾の嵐をセイバーは予め知っているかのような動きで躱しています。

時には武器で弾いていますのでやはり英雄は恐ろしいものです。

武器が届く距離になつたセイバーは距離を空けられないよつて執拗に攻め立てます。

ですがアーカードは避けのこともなくただ撃ち続けています。

「くつ、くつなつてこる!!」

セイバーが怒るもの無理はありません。

セイバーの攻撃は確かにあたっています。

アークードは血を吹き出し、腕を切り落とされ心臓を突かれ、首すら落とされました。

ですがそれらはまるで無かつたかのように瞬時に再生しています。

「どうなつてこるの!? あれじゃまるで不死じゃない!!」

セイバーのマスターは田を見開いています。

「おい坊主・・・何かわからんのか?」

「無茶言つなよ・・・サーヴァントの宝具までは分からんんだよ!! それに・・・前に見た時よりもステータスが上がってるんだ!! どう考えたっておかしいだろ!!」

前にウェイバーさんに会つたのは田中でしたね。 でしたら仕方があります。

彼は夜でこそその真価を表せるのですから。

「どうした、お前たち一人は見ているだけか? お前たち英靈が欲して止まない化物はここにいるぞ!!」

アークードの挑発に二人は動き出しました。  
まずははじめにランサーが地を蹴つて突進してきました。  
2本の槍を駆使してアークードを攻め立てます。

「馬鹿なつ!! 我がガイ・ボウの呪いが効いていないとでも言つのかつ

「!!

「ランサー!!」一人でバーサーカーを打倒しましょう!!

「了解だ!! 遅れを取るなよ、セイバー!!」

セイバーとランサーの共闘。

騎士同士の絆ですか。

前から後ろから翻弄してきますがアーカードは立つたまま打ち続けています。

そう、アーカードは回避する必要すらないのです。

「二人共じけ!!」

二人の騎士の間に割つて出るのはやはりライダー。  
牛車でアーカードを踏み潰しました。  
潰れるアーカード。

辺りは夥しい血が流れ、ほとんど原型を留めていません。  
騎士二人はそこから離れてライダーを睨みます。  
その視線は『次はないぞ』という意味が込められています。

「終わったの?」

「・・・まだだ。まだ終わってないっ!!あのバーサーカー何なんだよ!!」

アーカードの残骸に群がるコウモリたち。

それらは吸収されていき、象られた影はゆっくりと身体を起こします。

「・・・素晴らしいぞ英靈(サー・ヴァント)。ならば見せてやるが、本当の吸血鬼(わたし)の鬪争というものを――」

——拘束術式第一号まで開放。

アーカードの形が崩れる。  
死んだのではありません。

液状になつた彼から夥しい程の瞳が現れたのですから。  
サーヴァントが皆動きを止めました。  
——にいる全員がこう思つているでしょう。  
『あれは本当に英靈なのか?』と。

「不味い、あれは物凄く不味いのよ」

「同感だライダー···下手をすればマスターも危険だ。一時撤退する  
べきだ」

「···やむおえん。我が主よ、今日は引かせて頑きたい」

「まあ良し。今回は撤退を許す」

ランサーのマスターの気配が消えて安心したのでしょう。  
ランサーから殺氣が消えました。  
セイバーも逃げるつもりのようです。

「悪いが引かせてもらひつ」

「ビンへ逃げるつもりだ?」

ランサーの顔が驚愕に染まる。

そう、ランサーの左腕が宝具だと喰われていたのですから。

「ぐああああああああああああ!!!!」

「う、ランサー!! 貴様あ!!」

セイバーは狗を真つ二つに斬り裂きました。  
ですが斬られた狗から腕が飛び出しました。  
その手には白銀の銃。

セイバーはそれすら予想していたのか腕を斬り飛ばします。  
セイバーはとてつもない直感をもっているようです。

「大丈夫かランサー!!」

「ぐつ・・・腕を持つて行かれた」

苦しそうな表情です。

このまま倒せるでしょうか。

「さあどうした? まだ腕がちぎれただけだぞ。かかるてこい!! 剣を振  
れ!! 槍で突き刺せ!! チャリオットで踏み潰せ!! 一撃必殺の技を出せ  
!! さあ夜はこれからだ!! お楽しみはこれからだ!! ハリー！ ハリー！  
ハリー！ ハリー！ ハリー！ ハリー!!!」

興奮を抑えきれないアーカードを見て他のサーヴァントは苦虫を  
潰したような顔をしています。

「ここは任せて退けランサー」

セイバーの剣から暴風が吹き荒れました。  
光で前が見えません。

「忝ない・・・勝負は必ず」

「ああ、我が名に誓おつ。さあ行け」

ランサーは粒子になつて消えてしましました。  
これで残るはセイバーとライダー・・・あれ?  
見渡してもライダーがいません。

セイバーに目を取られていた隙に逃げたようです。  
思つていたよりも頭が回るようです。  
でもこれでセイバーだけです。  
あちらにもマスターがいますので置いて逃げることはしないで  
しょう。

なにせ騎士なのですから。

「どこにもどこにも逃げ出すとは・・・貴様らそれでも英靈のつもりか、  
恥を知れ!!」

おそらく逃げた人達は誰一人聴いていないでしょう。  
唯一残ったセイバーだけは悔しそうです。  
あちらのマスターは一向に逃げませんが何か策があるのでしよう  
か?

「アイリスファイール、この場は私が食い止めます。その隙にせめて貴  
方だけでも離脱してください!!出来る限り遠くまで」

セイバーの頼みを聴いてもあちらのマスターは動きません。  
首をふるばかりです。

「アイリスファイール、どうか!!」

「大丈夫よセイバー・・・貴方のマスターを信じて!!」

アーカードに勝てるということでしょうか。

確かにあのセイバーはまだ何か隠し持つているような気がします。果たしてそれはアーカードを倒し得るものなのですか。

「来ないと言つのであれば私が行こひ。覚悟は良いか、お嬢さん」

「ハアアアアアアアアアアアアア!!!」

再び交差する銃と剣。

撃つては躲し、斬つては再生する。

止まらない攻防。

しかしセイバーの疲労が見て取れます。

終わりは近いかも知れませんね。

「ああ、終わりだ」

何処からでしようか。

アーカードのものではない銃聲音が聞こえました。  
なるほど、最初から狙いは——私だったんですね。  
銃弾は私を撃ちぬくでしょう。

そう思っていました。

「なん、だと!?」

私の前に突然女性が現れました。

金髪に黄色服装で丈の短いパンツを履いています。

外国の婦警さんのような格好の人人が何故こんな所に?

「遅いぞ婦警。もう少しで我が主が撃ち抜かれるところだつた

「す、すみませんマスター!!でも……ここ何処ですか?しかも撃たれましたし」

「今は『仮』であるな」

「や、ヤー!!」

「そんな、新しいサーヴァントなんて!!」

「見たところキャスターというわけでも無からずですね。だとすれば宝具。サーヴァントを召喚する宝具ですか」

アーカードにそんな能力があったんですね。  
でもこの婦警さんは…頼りにならなさそうなんですが、アーカードが信頼しているのですからそれなりに強いのでしょう。

「おい、婦警。銃を出してあそことあそことあそこを狙え」

「ヤー!!」

婦警さんは虚空から銃を出現させました。  
アーカードの銃とは比べ物にならない大きさの銃。  
いえ銃ではなく大砲みたいです。  
見た目からしてすげ重そうですがそれを軽々と持ち上げています。

・・・あの腕でじつやつて持っているんでしょうか?

「令呪を持つて我が傀儡に命ず!! セイバー!! アイリストフィールを連れて必ず逃げ切れ!!」

「ドンッ!! ・・・ ドンッ!! ・・・ ドンッ!!

アーカードが指さした方角に放たれる弾丸。

弾丸が風を切る高音が駆け抜けていきます。

一つも命中しなかったようです。

セイバーも令呪によつて逃げてしまつたようです。

「結局全員に逃げられてしまつましたね」

「そつでもない。こちらに来い桜」

「・・・」れは

アーカードに付いて行ってみると血を流して倒れている女性がいました。

「」の人は街に行つた時にすれ違つたよつた。

「どうやら関係者らしいな。どうする、殺すか？」

「人間ですかマスター？殺すのは不味いんじゃ・・・？」

「お前は黙つていろ婦警」

「は、ハイいい！」

「」の人を生かしておけば私が危険です。  
ですが気になつてしまひます。

私と似たような感じがしてなりません。

「・・・連れて帰ります。運んでください」

「婦警、任せたぞ」

「イエス、マイマスター!!」

長い夜が終わりました。

帰つたらおじさんと一緒に寝ようと思ひます。

私は抱ぎあげられる女性を見ながらそり考へるのでした。

name ディルムツド・オティナ

クラス ランサー

筋力：B 耐久：C 敏捷：A+ 魔力：D 幸運：E 宝具：B

宝具

破魔の紅薔薇（ゲイ・ボウ） ランクB 魔力の循環を断つ宝具。

必滅の黄薔薇（ゲイ・ボウ） ランクB 治癒不可な傷を負わせる。

保有スキル

対魔力：B 詠唱が三節以下の魔術の無効化。それ以上の魔術でも傷つけるのは難しい。

心眼（真）：B 修行・鍛錬により得た戦闘論理。窮地において活路を導きだす。

愛の黒子：C 異性に、ディルムツドへの強烈な恋愛感情を懷かせる魅惑。対魔力や抗魔力で回避可能。

説明

フィン・マックールの許嫁と共に駆け落としたのちフィンに許され

る。しかし、瀕死の重傷をおつたデイルムッド。居合わせたフィンはすくつた水で傷を癒せる能力を持つていたがすくつてきた水を2度もこぼし、3度めを汲んできた頃にはデイルムッドは事切れていた。作者はこの事実を知りませんでしたので知った時の後悔がすごかつたです。

ランサークラスは非業の死が多すぎですね。

name ギルガメッシュ (AUO)

クラス アーチャー

筋力：B 耐久：B 敏捷：B 魔力：B 幸運：A 宝具E→E

X

宝具

王の財宝（ゲート・オブ・バビロン） ランクE→A++ 黄金の都へつながる鍵剣。宝物庫を開けて中から取り出せる。

エア ランクEX 技名 天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）。乖離剣。対界宝具であり、固有結界などを破壊できる他、威力もエクスカリバーに匹敵、またはそれ以上の威力をもつ。

保有スキル

対魔力：C 二節以下の詠唱による魔術を無効化。

単独行動：A マスター不在でも行動可能。ただし宝具使用など大掛かりなものはマスターのバックアップが必要。聖杯戦争が終わればスキルの影響がなくなるので現界不可。

黄金律：A 人生において金銭がどれだけついて回るかの宿命。Aなので金ピカ。

カリスマ A+ 大軍団を指揮。統率する才能。もはや呪いの領域。

神性 B (A+) 3分の2神で3分の1人間であるため。しかし本人が神を嫌っているのでランクダウン。

#### 説明

古代バビロニアの王。

藏には世界の全ての財の原型が眠っている。  
神によって翻弄された生涯で、不老不死を求めて冒険したが一歩及ばなかつた。

我らが英雄王で残虐なシーンが多いがそれ以上に王としての品格があるため殺すはずの人物を遺臣として扱つたりするなどとにかくカッコイイ。

ただし、慢心が過ぎる為やられことが多い。

スタッフ曰く「慢心しなければ最強」とまで言われている。

name イスカンダル

クラス ライダー

筋力：B 耐久：A 敏捷：D 魔力：C 幸運：A+ 宝具：A

+ ↴ EX

#### 宝具

遙かなる蹂躪制覇(ヴィア・エクスプレグナティオ) ランクA+ 二匹の神獣を呼び出して使役。速度、敏捷性に優れてい。

王の軍勢(アイオニオン・ヘタイロイ) ランクEX 生前のイスカンダル軍団をまるごとサーヴァントとして召喚する固有結界。それが単独行動E をもつてるのでかかる魔力は起動時がほとん

どで、維持にはそれほど魔力を使わない。まるごとではなく個別でも出せる為、利便性が良い。マスターがケイネスだった場合かなり厄介。ちなみに呼び出されたサーヴァントは宝具を所持しておらず、宝具開放などは出来ない。

#### 説明

我らが王。

漢の中の漢。

作者も同胞に・・・無理ですよね。

オケアノスを求めて遠征、征服を続けたがやがて崩壊した。声優さんの本気を感じました。

name アルトリア（アーサー・ペンドラゴン）

クラス セイバー

筋力：B 耐久：A 敏捷：A 魔力：A 幸運：D 宝具：A +

+

#### 宝具

風王結界【インビジブル・エア】 ランクC 風の魔力。剣を隠したり、空を飛んだり、攻撃にも使える。攻防隠に優れた宝具。

約束された勝利の剣【エクスカリバー】 ランクA++ 湖の乙女から授かつた聖剣。星に鍛えられた神造兵器。聖剣の中では頂点に君臨する。

全て遠き理想郷【アヴァロン】 ランクEX 聖剣の鞘。不老不死の効果を有し、呪いも傷も跳ね返す。セイバーの魔力がなければ効果を發揮しない。セイバー自身がこれを持っていないため使用不可。

name アイリスフィール・フォン・アインツベルン

マスター

AINTELLONによつて造られたホムンクルス。聖杯の器でもあり、イリアスファイールの母でもある。切嗣の夢を共に歩む良妻。ふくしい。

**n a m e** ケイネス・エルメロイ・アーチボルト（ケイネス先生）  
マスター

ランサーのマスター。風と水の二重属性。名門アーチボルトの嫡男で神童。降霊科講師、政治的手腕、芸術、召喚術、鍊金術など多才。ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリに一目惚れしていて一途。プライドの高さから素直になれない。

哀れ過ぎるので誰か救済してあげて欲しいです。

**n a m e** 衛宮切嗣

マスター

魔術師らしからぬ人物で魔術ではなく近代兵器（銃、爆弾など）を使用する。起源弾という切り札を持っている。妻だけでなく愛人も持つ。正義の味方を目指していたが挫折。聖杯に全てをかけている。

**n a m e** セラス・ヴィクトリア

クラス 吸血鬼

筋力 B 耐久 C 敏捷 B 魔力 C 幸運 A + 宝具 B +

宝具

ハルコンネン ランクB+ 長距離ライフル。主力戦車を除く大体のものに通用する。

アーカードによつて召喚。

本人はここがどこかわかつていな。

アーカードによつてドラキュリーナになつた。

別名婦警。おつかなびつくり夕方を歩く超巨乳。  
呼び出された時期によりまだ誰の血も吸っていない。

name アーカード（桜がマスターの場合）

クラス バーサーカー

筋力 A 耐久 B 敏捷 A 魔力 A 幸運 E

宝具 D + ↴ EX

以下同文

## 人形、愛、依存

未だ目を覚まさない黒髪の女性。

昨夜から1~2時間ほど経っているのですが目覚める気配があります。

暗殺者のような全体的に黒っぽい色をしていて腰にナイフと銃が隠されていましたので没収しました。

昨夜婦警さんが片手でラクラクと運んだのには度肝を抜かれました。

婦警さんも吸血鬼みたいですがアーカードと違つて目は赤くありません。

禍々しさではなく優しさの方が優つてるのは彼女の美点ですね。更に目を引くのが存在感の塊。

ありえない大きさの胸。

何を食べたら・・・。

私は平らな自分の胸を触つてしましました。

加えて今日はとても暇です。

雁夜おじさんは日中だといつのに情報収集の為に出かけてしまいましたし、アーカードは地下の蟲巣の蟲を全て排除したあと眠ると言つて消えてしまいました。

暗い所が好きとは吸血鬼らしいですね。

対して婦警さんは珍しそうに間桐邸を見て回っています。

色々と案内をしてあげたのですがどうしてあんなにおつかなびつくりなんでしょうか。

お祖父様もいませんので安全なはずなのですが。

キヨロキヨロと落ち着いてくれません。

案内が終わると婦警さんは街に行くと言つて出て行つた後、帰つてきてケー キだけ置いてまた出て行きました。

お客様用との事ですが、状況が分かっているのでしょうか。

私もこの女性を家に入れている時点で人のことは言えませんので本人には言わず胸の内に仕舞っています。

結果私だけ家でやることもなく、なんとなくこの女性と一緒にいます。

肩に届かないくらいのショートヘアで前髪は分けています。

細いまつ毛に無駄のない体つきなので羨ましいです。

私の身体が成長したらこんなスレンダーな身体になるでしょうか。

雁夜おじさんは遠坂葵の事が好きみたいです。

目標はあんなおつとりお嬢様でしょうか。

ですがあの人の替わりにはなりたくありませんから私なりの可愛さや美しさを追求していきたいですね。

この部屋は私の部屋のですが本当に何もありません。テレビはありませんし、服も最低限しかありません。本は教科書だけで後はベットが置かれているだけです。

当然ですね。

私はつい最近まで人形だったのですから。

娯楽に興味などもてるはずもありませんでした。

何をするにもお祖父様の許可が必要でしたのでどのみちどうもなりませんでしたけど。

不思議なことに今の私は心を持つているように思います。こんなに何かを考えることなんてしませんでした。

これも全て雁夜おじさんのお陰ですね。

昨夜は一緒に寝て貰えませんでしたので帰つてから思いつきり抱きしめもりこますからね。

ちょっととした好奇心から指でこの女性の頬を突いてみます。フニフニとしていて癖になります。

雁夜おじさんは遠坂葵の事が好きみたいです。

なら胸はどうなんでしょうか？

・・・やめておきましょう。

いけない道に迷いこんでしまいましたから。  
ぱおつと眺めては頬を突いてみます。

僅かに反応がありますのでそろそろ起きても良いんですけど。

それでも私も眠くなってしましました。

どうせ起きないんですから私も寝てしまいましょう。

女性の腕に入り込むように身体を丸めると私は目を開きました。

——はっ!!

目を開けて最初に見えたのは傷を負つて寝ていたはずの女性でした。

じつと私を無表情に見つめています。

私は手を伸ばして女性の頬を触るとすべすべな肌がとても気持ち  
良いです。

「貴方は確かバーサーカーのマスターでしたね」

「はい、そうです」

「何故助けたのですか。私がいても邪魔なだけでしじう？」

私に聞かれても困ってしまいます。  
自分自身でさえ理解していないのですから。

「理由なんてありません。ただ放つておけなかつただけです」

「・・・そうですか」

女性は私に覆いかぶさると私の背中に手を回してぎゅっと抱きしめました。

なんだか凄く温かいです。

「貴方の目・・・見ていいられませんね。まるで切嗣に会つ前の私のよう

です」

「切嗣？」

「あ・・・私は頭でも打つてどうにかなってしまったみたいですね。今

の言葉は忘れてください」

「じゃあ貴方のお名前は？」

「・・・ありません」

「じゃあいつもは何て呼ばれているんですか？」

「久宇 舞弥・・・大切な人がくれた名前です」

遠い目をしています。

よほど大事な人なんですね。

私にとつての雁夜おじさんみみたいに。

「それにしても、貴方は子どもにしては丁寧な言葉づかいなのですね」

「そうでしょうか？」

思いの外私と舞弥さんの会話は弾みました。

家族の事、バーサーカーの事など色々なお話をしました。

舞弥さんは見た目ほど冷徹で怖い人ではないかもしません。

けれどバーサーカーの宝具や真名、スキルなどは伏せました。  
聖杯戦争なのですから仕方ないです。

しかし弾んでいた会話もお互いに同じような過去を持つていることを知ると途端に話しくくなってしまった。

「そう、貴方も大変だったのですね」

「・・・」

「良く頑張りました」

抱きしめられる私。

本当は私じゃなくて舞弥さんが抱きしめられるべきなのに・・・。  
そう思つて私も抱き返しました。  
人とくつつくのがこんなにも心地よいものだつたなんて知りませんでした。

私の視界が歪んでいつてしまします。  
泣きたくないのに・・・。  
もう止まりません。

「大丈夫。大丈夫」

「・・・グスツ・・・ズズツ」

「怖い夢は終わつたんでしょう？なら前を向きなさい。後ろは見ちゃダメ。貴方は耐え切つた。だからそれを誇りなさい。

汚れていても必要としてくれる人のために頑張りなさい」

「・・・はいっ」

「ふふ、よく出来ました」

恥ずかしいくらいに取り乱してしまいました。  
心から泣いたのは久しぶりのよつな氣がします。

「なんだか慣れているよつじます。お母さんなんですか？」

「・・・皿いどもを産んだこともあつました。直ぐに分かればなれになりましたけど」

「・・・そつなんですか」

「ナビもに聞かせる話ではあつませんでしたね」

「えっと・・・そ、そつでした。リビングに婦警さんが買つてきてくれたケーキがありますから一緒に食べませんか？」

「は、ケーキですか!!・・・いほん、頂きます」

妙に嬉しそうですが良かつたです。

このまま話していくても暗い話になってしまつたから。

リビングに場所を移して、テーブルを挟んで座り、ケーキの箱を開けました。

中にはショートケーキ、チョコレートケーキ、モンブランケーキなど様々なケーキが入っていました。

舞弥さんは食ひ入るよつに見てています。  
どうやらナホビケーキがお好きなよつです。

「お好きなモノをどうぞ」

「い、いえ。家主より先に決めるのはいけません」

「お気になさらず。私はどれも好きですか?」

「で、でしたらこのチョコレートケーキを頂きます」

「ビーフ」

さつきまで切れ目でカツコイイ人だと思つていましたが今は普通の女性に見えます。

甘いものが好きなんて意外すぎて可愛いです。

「これは・・・駅前の有名店のものではないですか?」

「そうみたいです。お好きなんですか?」

「ええ、あそこのケーキは絶品です」

舞弥さんは「」のお店が美味しい、あそこはコスパが悪いなどと力説しています。

触れてはいけないスイッチに触つてしまつたようです。

「はつ、すみません。取り乱しました」

「い、いえ」

フォークを置くと舞弥さんの瞳が先ほどとは違う人形のような瞳に変わりました。

「一つだけお聞きしたい。貴方が聖杯に願つものはなんですか?」

「私は・・・雁夜おじさんの身体を元に戻してあげたいんです。もう一ヶ月も持たないみたいですから」

「・・・そう、ですか。わかりました。でしたら私と貴方はやはり敵ですね。ケーキありがとうございました。次にあつた時は・・・殺します」

舞弥さんの瞳には何も[写]りません。  
行つてしまふんですね。

名残惜しいですが引き止めることなど出来ません。  
それをしてしまつたら私は私でなくなつてしまします。  
大切な人の為に戦う私が消えてなくなつてしまします。  
決してそれは許されません。

「それで良い。私と貴方は敵。今日は何かの間違いだつたんです。それでは・・・」

舞弥さんは振り向くこともなく間桐邸から出て行きました。  
床に落ちた水はきつと氣のせいなんでしょう。

暇だつた一日は満たされてまたこぼれました。

それで良いんです。

元々私はそういう存在なのですから。

外を見ると日が沈みかけていました。  
視線を下ろすと丁度雁夜おじさんが帰つて来たようです。  
玄関で待つてあげましょう。

「ただいま、桜ちゃん」

「おかえりなさい雁夜おじさん」

「わざわざあの女性とすれ違ったなんだけどよかつたのかい？」

「はい、わざわざ話は終わりましたから」

「そつか、なら今から『』飯を作るから待つてね」

雁夜おじさんは若干足を引きずつてキッチャンに向かいました。  
私もそれに付いてこきます。

「おや、おかえりのようだ」「だ

「バーサーカーか。なんだか最近蟲達が大人しくてな。魔力を使って  
ないからかな」

「何を言つてこる？ お前の中の蟲は既に取り除いた

「・・・えつ。こつの中に！」

「お前が私を召喚して倒れるのを支えた時だ。でなければあの化物に  
殺されていただろう」

雁夜おじさんがメデューサの田を見たみたいに固まっています。  
でも良かつた。

蟲をえないなればおじさんが苦しむ事がなくなります。

寿命は・・・変わらないかもしけませんが少しは変化すると思いま

す。

それまでにおじさんを何とかしないと。

「バーサーカーには世話になりっぱなしだな。ありがとう」

「お前正氣か？ フフフフハハハ!! 吸血鬼にあつがとうだとい？ やはつお  
前は人間らしい」

吸血鬼に感謝すると面白このでしょつか。

・・・珍しこことは確かですが。

雁夜おじさんが夕食を作り終え、いつもの様に一人で食事を済ませました。

そしておじさん「こねてこねてようやく抱きしめてもらいました。  
おじさんに抱きしめられると身体が疼いてきます。

「や、桜ちゃん？」

「こ」のままでいてください」

「今日はやけに甘えん坊だね。・・やつぱつ葵さんや凜ちやんと会いたいよな」

雁夜おじさんは勘違いをしています。  
私は甘える対象がいないからおじさんに甘えてこるわけじゃない  
です。

おじさんだからこそ甘えているんです。

これを口にできたらどんなに良いんでしょうか。

私の臆病な心ではとても伝えられません。

屈んでくれたおじさんの胸に顔を埋めます。

雁夜おじさんの腕の隙間から見える窓の外。

夜の世界が冬木を覆い尽くしています。

私はこ」の温もりの為に戦います。

おじさんを愛するが故にーー。

## 狂信者達の宴

舞弥さんが出て行つてから数夜。

私は今未遠川の堤防の上にいます。

隣にはキャスターのマスター。

それ以外の人もちらほらいます。

キャスターのマスターは興奮を隠せないよつで、キラキラとナビも  
みたいな目をしています。

祭りでもないのに何故こんな騒ぎになつてゐるかといふとその答  
えは河に現れた巨大なタコ？のせいです。

キャスターの宝具らしいのですが凄く気持ち悪いです。

それをみて興奮するキャスターのマスターも正氣を疑います  
が・・・。

私はこんな場所に来たくはなかつたのですが、おじさんが姉さんを  
助けようとキャスターの魔術の餌になりそうな所を

特別に助けて頂いたようすで仕方なく今回だけ協力すること  
になりました。

姉さんは本当に迷惑です。

私達がキャスターから頼まれた事は二つ。

キャスターを今回に限り攻撃しない事と来るであらうアーチャー  
のサーヴァントを止めることだそうです。

その代わりにあちらのサーヴァントの真名とおおまかな過去を教  
えてもらいました。

何度も何度もジャンヌと言つていたので怖かったです。

また、キャスターはアーカードの正体も知っていました。

なんでも『黒魔術に触れたものなら誰でも思いあたぬ』との事です。  
恭しく礼をしていました。

それにしてもアーカードがお祖父様を眠らせているのですがこんなに離れても大丈夫なのでしょうか。

アーカードの代わりに婦警さんが私の警護についてくれていますから外敵には対処出来るでしょうけど。

でも婦警さん。

間の抜けた声で「はあ、す」いつすねえ。でもあの沢山の田を見るとマスターを想像しちゃいますね」と言いました。気が抜けてしまいますので・・・今は集中して貰えますか？たぶん狙われていますから。

「・・・冷たい」

キヤスターの宝具の触手が水面を叩く度に水飛沫が飛んできます。キヤスター一人にあちらはサーヴァント2人がかりですね。

ずるいと思います。

セイバーが触手を斬つても直ぐ再生していますので数はあまり関係はないようですが。

ランサーの姿が見当たりませんので参加していないのでしょうか。片腕で戦うというのも厳しいですからね。

ライダーは・・・役に立つてないのでしょうか。

あそこにウェイバーさんがいるとしたらいざや可愛い声をあげているのでしょうか。

考察している私の隣でキヤスターのマスターは叫び始めました。

「くふふふふ・・・もう退屈なんてさよならだ。手間暇かけて人殺しなくてすることもねえ。ほおっておいてもガンガン死ぬ。潰されて、千切られて、碎かれて、喰われて。死んで死んで死にまくる。まだ見たこともない腸も次から次へと見られるんだ。毎日、毎日、世界中、そこのいら中で!! 引っ切り無しの終わりなし!!」

苦手ですこの人。

静かにしてもらいたいです。

その願いが叶つたのでしょうか。

「あっ・・・」

後ろに吹つ飛んだキャスターのマスター。  
誰もが彼を見て後ずさりました。

「なに？・・・ねえなに？」

本人は気づいていません。

目のいる女性は恐怖が顔に出ています。

キャスターのマスターが自分のお腹にあてた手を見ると、発狂する  
わけでもなく逆に見つからなかつたものが見つかつたとばかりに微  
笑みました。

「すつづえきれえ・・・。そつか・・・そりや氣づかねえよな。灯台下  
暗しとは良く言つたもんだぜ。誰でもねえ。俺の腸の中に探し求め  
てたもんが隠れていやがつたんだ。ふう・・・やつと見つけたよ。ずつ  
と探してたんだぜ？なんだよ・・・俺の中にゐるならあるつて言つて  
くれりやあいいのにわ」

そう言つてもう一度衝撃を受けると、無垢な子供ものよつた微笑み  
を浮かべて死んでいきました。

額には穴が開いています。

「うわああ!!・・・狙撃みたいですね。場所わかりますけどどうします  
か？」

「いえ、放つておきましょう。婦警さんがいれば撃たれても・・・大丈

夫ですよね？」

「や、ヤー！」

「いま、うわああ！！って言つていきましたが本当に大丈夫ですよね？心配になつて来ました。

「・・・あ、戦闘機が来てますね」

婦警さんが指さした方角に2つの小さな光が見えました。  
まつすぐこちらに向かっています。

上空に霧がかかっているせいか1機がキャスターに接近しました。  
確認しに行つたのでしょう。

しかしたくさんの触手が追いかけ、あつけなく捕まつてしまいまし  
た。

そして口の中へ・・・。  
もう1機も突進していきます。  
死ぬ氣でしようか。

「あ、マスターですよ。あの戦闘機の上にいます」

「・・・えつ？」

私では見えませんがきっとそつなんでしょう。  
飛行機の発している微かに黒く光つてゐるよつです。

「ミサイル撃つちゃいましたね。あの金ピカの飛行機大丈夫でしょうか？」

「よく見えますね？」

「だつて吸血鬼になつちゃいましたから

後悔しているのでしょうか。  
表情からは読み取れません。

「私に見えるのは碧い軌跡と紅い軌跡だけです」

「あはは・・・人間ならそれが普通ですよ」

・・・あれ？

戦闘機がこちらに向かってきています。

このままだとキャスターに当つてしまします。

「あ、消えた」

運の良いことにキャスターは突如消えました。

同時にライダーも消えました。

また逃げたのでしょうか。

黒い戦闘機を追いかけていた黄金の戦闘機？もばら撒かれた黒い塊によつてバランスを崩したようです。

河の水面に片翼をもがれ着水しました。

アーカードが操作している戦闘機は橋の下をくぐりました。

アーカードはそのまま飛行を続け攻撃目標をセイバーに変更しました。

戦闘機から溢れる黒い塊がセイバーを襲います。

セイバーは剣を黄金に輝かせて反撃のチャンスを狙つているようです。

逃げまわつていたセイバーが突然振り向いて剣を構えました。

剣が更に輝きを増してるので宝具を使用するようですね。

アーカードは戦闘機から飛び出て懐から銃を取り出しました。

「危ないマスター!!」

アーカードの後ろから飛来する武器。  
婦警さんの声も虚しくそれはアーカードの両腕を落とし、身体を貫きました。

アーカードは自由落下して河に落ちていきました。  
武器を放ったのは橋に付いている照明器具で反射している黄金の  
鎧のサーヴァント、アーチャー。  
腕を組んで悠然と見下ろしています。

「アーカードは大丈夫ですよ。それよりもあれは?」

「信号弾みたいですね」

信号弾の位置にキャスターが再び現れました。  
水上に立つセイバーが黄金の剣を天に向けて振り上げます。  
収束していく光と風。  
そして放たれる——黄金の剣。

「エクス・カリバー ああああああ!!!」

河を裂き、キャスターを飲み込んでいきました。  
舞い上がる黄金の風。

あれが、宝具。

手に届くことのない理想を見ているような。

幻想的な輝き。

この場にいる全員がその有り様に心を奪われています。

・・・私には眩すぎます。

婦警さんも同様みたいです。

婦警さんは堪らないと光が收まる前に私の手を握つて歩き始めま

した。

置き去りにしたキャスターのマスターは誰かが処理してくれるでしょう。

「どうへ行くんですか？」

「マスターのところです。あそこによつといても怪しまれますからね」

だいぶ歩いたところの川辺にアーカードとキャスターがいました。私達は少し離れたところで足を止めました。

近寄つてはいけないと感じてしまつたからです。

キャスターは下半身を失つていってもう長くはないでしょう。

「ふふ・・・何故貴方が憐れむですドリキュラ（あくま）よ。」

「お前は・・・お前は俺だ!!呆れ返る祈りの果てに神は降りてくる、祈りと祈りの果てに哀れな私達の元に神は降りてくると信じて裏切れ狂つた、化物だ!!」

「・・・そつかも、しれませんねえ。ですが私と貴方は違います。あなたには護るべき國も領地も國民も愛する人さえいな

いのですから。あの光のなかで私は確かに答えを見つけました。私は逝きます。ですが貴方はいつまで生き続けなければな

らないのですか?私以上に哀れで心の弱い貴方はいつまで戦い続けなければならないのですか?」

「膨大な私の過去を膨大な私の未来が粉碎するまでだ」

「ふふそうですか。・・・おお、声が、声が聞こえます。・・・彼女の声が、あの光が見えます。逝かなければ・・・彼女が——ジャンヌが待っています。——次はジャンヌと共にゆっくり語らいましょう。エイメン」

「・・・エイメン」

キヤスターの身体は光となつて消滅しました。  
最後の言葉は誰に向けたものだつたのでしょうか。  
闇の空を仰いだアーカードはふつと笑うと振り向きました。  
お互に悪魔の所業を続け一方は人間として、一方は吸血鬼（ばけもの）として理解し合う事ができたのでしょうか。  
紅い瞳には先程までの迷いが見られません。  
それが答えなのでしょう。

「帰るぞ桜、婦警」

私を通り過ぎるアーカードの背中を見ながら私は間桐邸への帰路につきます。  
その背中はどこか寂しそうでした——。

name	ジル・ド・レ
クラス	キヤスター
筋力：D	耐久：E
敏捷：D	魔力：C
宝具：A+	幸運：E

宝具

螺旋城教本（プレラーティーズ・スペルブック）ランクA+ 水魔  
を容易に召喚して戦わせる。魔導書がある限り水魔は倒し

ても復活する。また本自体も修復機能をもつ。キャスターのクラスとして呼び出された所以はこの本にある。

#### 説明

百年戦争のオルレアン包囲戦でジャンヌ・ダルクに協力し、戦争の終結に貢献し「救国の英雄」とも呼ばれた。しかしジャンヌが異端として火炙りになった後鍊金術（おそらくハガレンっぽい理由）、黒魔術にのめり込む（財産を狙う政敵達によ

り誇張された一面もある）。その後絞首刑、死体が火刑になつた。  
zeroの世界ではCOOL教に鞍替えした。セイバーをジャンヌと間違えるほど狂つており、最後の瞬間もジャンヌを思い浮かべた。

声優さんの握手会では大人気だつたらしく、他の声優さんが『やめておけ』とからかつたりしたらしいです。

name 雨生龍之介  
マスター

数代前に断絶した魔術の家系出身。好奇心が人を殺すを実現した人。彼の最初の犠牲者は姉。COOL大好き。  
軽いようで哲学的な面もあつたりなかつたり。  
COOL以外特に印象に残つていません。

## 間桐桜

翌日。

雁夜おじさんは全身火傷を負つて間桐邸に帰つてきました。  
これほど衝撃的なことは初めてです。

何度も声をかけますが氣絶しているため返事がありません。  
婦警さんにお願いして私の私室に運んでもらいました。  
その時お義父様がなにやらふざけた事を言つていたのでアーカードに頼んでお仕置きしてもらいました。

叫び声を上げていましたがそんなことはどうでも良いことです。  
雁夜おじさんを連れてきたのは神父服を着た吉峰綺礼という男で  
偶然通りかかつて助けたということでした。

胡散臭い人ですが今回はいてくれて助かりました。

聞く所によると、おじさんに火傷を負わせたのは遠坂時臣らしいです。

ゼッタマイゴルシマセン。

直ぐにでも殺しに行きたいのですがおじさんを一人には出来ません。  
あの人はお仕置きされて役に立ちませんから。

「勝手に助けておいて恐縮だが一つ頼まれてはくれないか？」

「・・・頼みですか？」

「ああ。今回の聖杯——アイリスフィール・フォン・アインツベルンを手に入れて欲しいのだ。バーサーカーであれば容易だ」

「・・・良く分かりませんが、助けて頂きましたので協力します」

「ありがとうございます。期待している」

「夜になつたら連れて行きます。場所の指定は任せます」

「了解した。また会おう」

「…」  
場所と時間の指定など必要最低限の用事を済ませるとすばり帰つて行きました。

私は直ぐにおじさんの様子を見に私の部屋に向かれます。全身火傷を負つてるので所々肌の色が変色し、変形しています。なんで雁夜おじさんばかり…。

「アーカード。雁夜おじさんは死なないよね？」

「まだ死なないが前よりも寿命が減つてゐる可能性は高い。あまり歩かせないほうが良いな」

「…」

雁夜おじさんの額からは汗が流れ、体温も平熱とは思えません。  
苦しそうな顔。

心臓を驚撃みにされていふよつです。

おじさんが苦しいと私も苦しい。

私の頬を伝う涙。

どうして・・・ぢりじり・・・ぢりじり!!

落下寸前の私の涙。

それを救つてくれるのは優しい手。

私をいつも助けてくれる優しくさげる手。

「…や、へり、ちゃん。な、かないで、くれよ

震える手が必死に私の涙拭います。

私はおじさんの手をぎゅっと握りました。

するとおじさんは無理に微笑んでくれました。

「……む、へい、ちやんは……わら、つてなくちや……だ、めだ  
よ」

「……はい。私は笑います……だから死なないでおじさん!!」

「だ、いじょ、ぶ・・・だか、ら・・・す」、しやす、むね

事切れたよにおじさんの全身の力が抜けました。  
先ほどまでとは違う穏やかな寝顔。

「よかつた・・・」

「出かけるのだから桜も休んでおけ。出発は日没前だ

「・・・はい」

「では私は寝る。婦警、桜についていろ」

「ヤーー」

アーカードは地下へ。

婦警さんは心配そうに雁夜おじさんを見ています。

今はゆっくり休んでください。

私はおじさんのあの照れくさそうな笑顔が大好きなんですか  
らーー。

そして日没前。

朱み掛かった夕焼けの中、言峰神父に教えられた場所に到着しました。

アーカードが玄関からどうぞ」と中に入りました。  
しかしどの部屋もいません。

縁側から出て屋敷を歩くと小さな建物がありました。  
倉庫のようですが一応見ておきましょうか。

「アーカード。あそこもおねがいします」

「ふんつ」

黒い扉を蹴り飛ばして中に入ると舞弥さんと赤い魔法陣の上で寝ている白髪のターゲットがいました。

舞弥さんが慌てて携帯を取り出しましたがアーカードがそれを打ち抜きました。

舞弥さんは銃を乱射しますがアーカードにそんなものは効きません。

あつという間に球切れになつたようでターゲットを一瞬見た後腰からスプレー缶を取り出しピンを抜いて床に投げました。  
スプレー缶から煙が放出され視界が奪われました。  
私は身構えました。

「煙で私を撒けるとしても思つてはいるのか、人間？」

アーカードの銃が音を鳴らすと舞弥さんの苦悶の声が聞こえてきました。

煙のせいでも見えません……。

「ほう、まだ動けるのか。お前はそこいらのフリーケスよりも骨がありそうだ」

床に倒れる音がしました。

視界が晴れてきて周りを見ると床に倒れている舞弥さんがいました。

右足がないので撃たれたのでしょうか。

一瞬ドキッとしたが私の心は意外にも冷静です。

「ぐつ・・・ま、だむ」

「舞弥さん」んにちは。あの人は貰つていきますね。婦警さん運んで頂けますか?」

「や、ヤー!・・・なんだか私運んでばっかりな気がする・・・シクシクツ」

「引き上げましょ!アーカード。もつ用はあります?」

「!」の女を殺さないのか?」

「氣絶しているみたいですから殺す必要もないでしょ!」

私の回答を聞いてニヤツと嗤つアーカード。

甘いのはわかつています。

ですが、殺しても殺さなくとも良いのであれば私は殺しません。殺してしまえば私は人間ではなくなってしまうのですから。

「ぱいぱい」

私は手を振つてこの場を後にしました。

受け渡しの場所は距離があるので近場にあつた車を頂きました。

運転をするのは婦警さん。

手慣れた手つきで鍵もないのにエンジンをかけました。

「あの・・・手慣れていますね」

「あはは・・・こんな」とをしている現場を抑えた事がありまして。その時に詳しく聞いていたので覚えていました」

「さすが婦警さんですね」

「・・・褒められてるんですねかね」

複雑そうですね。

私は純粋に誉めているのですが。

受け渡し場所に着いた頃には夜が更けていました。  
ビルの屋上から見る景色は初めてですが、美しいものですね。  
言峰綺礼は時間よりも前に来ていましたので直ぐに女性を渡しました。

「礼を言ひ。よければ令呪を進呈するが如何かな?」

「結構です。これで貸し借りなしです。それでは——」

「ああ、やうだ一いつ言いつ忘れていた。早く教会に向かつと良い。手遅れになるかもしかんからな」

「ビービービー」とですか?」

言峰神父は答へること無く屋上から出て行きました。  
なんだか胸騒ぎがします。

取り返しの付かないことが起つたとしてこる。  
そんな気がします。

「アーカード、直ぐに教会に向かいます」

「ビートがある?」

「あ、私分かりますよ!!」

「婦警さんお願ひします。急ぎましょ!!」

車に乗り込み猛スピードで走行していきます。  
後ろからバイクが来ていますがあれは一体・・・。

「えええええええ!!あれ、セイバーって人じやないですか!?不味い  
ですよマスター!!」

「慌てるな婦警」

アーカードは車の天井に素手で穴をかけて上半身を外に出しました。

懐から白銀の銃と黒銀の銃を取り出し、十字に構えます。  
セイバーとの距離はだいぶ開いています。

逃げ切れば良いのですが。

「うわあああ!!なんじゃそりゃああ!!」

事もあらうかセイバーはバイクで跳びました。

本来道路に沿つて走るはずのバイクが曲がり道をまっすぐショートカットをして迫ってきます。

常識外れです。

ありえません。

「・・・素晴らしい」

アーカードは銃を構えると飛行中のセイバーに向けて発砲しました。

私は瞬時に鼓膜が破れなによりに耳をふたせます。外でさえあれだけ五月蠅いのに車内だとその比ではないからです。

「はあああああ!!」

セイバーは片手で剣を握つて弾丸を弾きます。そしてそのまま道路に着地します。

「覚悟しろバーサーカー!!」

「そりだかかっこいい!!」

バイクを横につけたセイバーは車に乗り移るつと飛び上がりました。

振り下ろされる剣をアーカードは白銀の銃で受け止め、黒銀の銃で反撃。

寸前で躲しましたが鎧に少し掠つたみたいです。

セイバーは足場を無くして道路に転がつて行きました。一難去つたようです。

「た、助かつたあ」

「この程度で声を上げるとは半人前め」

「す、すみません・・・」

セイバーから逃げ切った私達はようやく教会に着きました。

教会のドアを開け、暗い教会内をみます。

月明かりだけが照明代わりですので開け放しておきます。

「奥に誰か居るみたいですね」

「・・・」

ゆっくり近づいて見覚えのある後ろ姿です。

「遠坂・・・時臣」

「・・・」

反応がありません。

無視というわけですか。

ですがそうはいきません。

私は力の限り時臣の身体を蹴りました。

・・・。

「・・・えつ？」

時臣は蹴られた方向に倒れてしまいました。  
どうなつて・・・。

「死んでいるな。あの神父がやつたのだろ?」

「・・・なるほどそれである言葉ですか」

私が殺したかったのにあの神父・・・。  
結果は同じですので構いませんが一言へりこほこの男に恨み事を  
言いたかったです。

「時間を気にしていたので何かあるんでしょ？」「

「ふん、下らない茶番だらうつな。桜、その影に隠れておけ」

言われるまま私は壇上の後ろに隠れました。

アーカードは時臣の遺体を元の位置に戻して闇に紛れました。  
とても静かな教会に足音が近づいてきます。  
けれど規則的な足音ではなく足を引きずつてくる音です。

「遠坂……時臣!!」

なぜ……なぜおじさんとの声が!!

「ぐつ……俺を殺した氣でいたか、時臣!!」

一步一歩ゆっくり歩いて近づいてきました。

「だが甘かったな……貴様に報いを下さるまで俺は何度でも——つ!!

そんなに、そんなに時臣が憎かつたんですね。  
おじさん、でも時臣は……。

「遠坂!!」

おじさんが立ち止まりました。

ボスンッともたれかかる音がしました。

「なつ……あ……あ……なに?」

「雁夜くん?」

——つ!!

このタイミングで来てしまつのですか!!  
こんな、こんなことって!!

「葵さん?——違つ!!俺じゃない!!」これは!!

床に倒れる音。  
微かに聞こえるあの女の足音。

「…満足してる、雁夜くん? これで聖杯は間桐の元に渡つたも同然  
ね」

「俺は…お、おれ」

「どうしてよ? 私から桜を奪つただけじゃ物足りないの?」

ナーフィッシュテイルノコノオンナハ。

「よつこもよつこの人を私の田の前で殺すなんて。どうしてつ

「ソイツが!! ソイツのせいで、その男さえいなければ誰も不幸になら  
ずこすんだ!! 葵さんだつて、桜ちゃんだつて!!

幸せになれたはず——

「ふざけないでよ!! アンタなんかに…何が分かるつて言つのよ!! あ  
んた…アンタなんか。——誰かを好きにな

つたことさえ無いくせに!!」

「あ、あああああ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ああああ!!!!」

雁夜おじさんが泣いてる。

私の雁夜おじさんが心から泣いてる。

こんな、こんな女の為に。

おじさんの大切な涙がこんな女の為に。

遠坂はいつもいつもいつもいつもいつもいつも私を不幸にする。  
アナタタチハゼツタイニゼツタイニコルサナイ!!

「・・・おじさん。それ以上はダメですよ。大丈夫私がいます。私はお  
じさんの事を全部理解していますよ。だから泣かないで。そんな女  
の為に泣かないで」

「・・・わくわく、わやん？」

「・・・わくわく？」

「気安く呼ばないでください遠坂葵。貴方は許しませんよ絶対に」

「え、どうして?——まさか雁夜くん桜になにかしたの?」

IJの女はどうまやー。

「何もしていませんよ。むしろ私を救つてくれました」

「な、な、な、どうして貴方はそんな目をしているの? 桜はそんな目はし  
ないわ!!」

「うるさいですよ。それにこんな私にしたのは貴方ですよ? 私が間桐  
に引き取られてからの事を教えてあげましょうか? まず蟲巣に放り

込まれて処女を奪われました、蟲にですよ？その後全身を蟲に侵されました。内も外も全部です。やめてくださいといつてもあの人達は逆に喜ぶんですよ？その後心を侵されました。お陰で見てください、この髪。遠坂の色から間桐の色に変わっちゃったんですよ？毎日毎日侵され続けた私を救ってくれたのは雁夜おじさんです。それに比べて貴方はなんですか？私が間桐に養子に出されるという時に最後まにかしたんですか？私が間桐に養子に出されるときに生き残るで反対したんですか？時臣が聖杯戦争に参加するときに生き残れるようになにかしたんですか？何もしていない癖に全部他人任せ、拳句の果てにハッ当たりですか？笑えませんよ、私達はこんなになつてまで必死にあがいでいるのに貴方は綺麗なままなんて。だから私は貴方に罰を与えます。それを眺めながら一生後悔しながら生きなさい。

手をあげるとアーカードが銃を構えました。

「懺悔なんて聞きません。何もしなかつた貴方が自分の危機が迫った時だけ行動するなんて許されません」

私は容赦なく手を振り下ろしました。  
放たれる弾丸。

それは確実に遠坂葵の両足を砕き分離させました。  
涙を流して許しを請うこの女は凄く醜いですね。

「私や雁夜おじさんにもし何かしたら・・・今度は殺しますからね」

意識を失った遠坂葵。

寄り添つよつて眠る遠坂時臣。

「馬鹿な人達」

私は視線を雁夜おじさんへ移しました。  
おじさんはカタカタと震えていました。

可愛うなおじさん。

でもこれで終わりました。

おじさんと私はもう遠坂に縛られることなんて無いんですよ。

「どうせ見てるんでしょ？ 遺体との女の女は任せますね。女は殺さないでくださいね」

パチパチと拍手が聞こえました。

「まだ幼いところの人の言動、態度。やはつお前は狂つていい。だがそれを許そう。私は神に仕える者だから」

「・・・」

芝居がかつた声を無視して教会を出ました。

婦警さんにかかえられたおじさんは寝ていました。

疲れていたのでしょうか。

雁夜おじさんの寝顔を見ながら明けていく夜を恨めしく思いました――。

## 持つ者、持たぬ者

雁夜おじさんの命は今夜まで。  
そうアーカードから告げられた私の顔はやがて絶望に染まつてい  
ることでしょ。

身体をボロボロにされ、心も踏みにじられたおじさんは生きる希望  
すら残つていないのです。

もう目覚めることはないでしょう。

雁夜おじさんは頑張りすぎたんです。

休ませてあげるのも優しかなのかもしだせん。

ですが、私は優しくはありません。

私は私のためにおじさんを苦しめます。

ライダーの事が嫌いだと語っていた私がこんな事を考えるだなん  
て思いもしませんでした。

人は変われる、変わってしまう。

些細なきつかけで変わってしまひのです。

雁夜おじさん。

田覚めた貴方は私を恨むかもしれません。

それでも私はやります。

おじさんに生きていてほしいからーー。

「間桐桜が令呪をもつて命じます。おじさんを吸血鬼にしなやこ」

「 yes - my master 」

ベッドに横になつているおじさんの首筋にアーカードの鋭い歯が  
食い込みました。

童貞であればドリキュラに、非童貞であればグールになる賭けです  
がどのみちおじさんを死なせないためにはこれしかありません。  
アーカードがおじさんから離れたのでおじさんの顔色を良く見て

みます。

暗がりで分かりづらいですがきっと生きてくれるはずです。  
なら私は残りの戦いを終わらせるだけです。

「行きましょウアーカード。聖杯戦争を終わります」

床に血まみれで倒れているお義父様を尻目に私は赤と碧の光の元へと向かいました。

婦警さんには先行してもらいました。  
本人もやる気だったのでサー・ヴァント相手でも少しほと頑張れるはずです。

「ソルジャーに来るのはあの金ピカだと思ったのだがなあ。まさか貴様たちとは・・・」

一度赤い橋を渡り切ろうとしている時でした。

橋の反対側から声が聞こえました。

あの野太い声はライダーですね。

馬に跨がりこちらの様子を見ています。

「ほう、未だ生き残っていたとはな」

「何故か戦の機会がなかつたもんではな。だが、よしあく戦ができる…  
そうだろ?、吸血鬼(ドラキュラ)——いや、ヴァンパイア!」

「それは私であつて私ではない。だが何処でその名を知つた?」

「ソルジャーのお嬢さんがアーカードと呼んでいたのを思い出してな。試しに逆から読んでみたら驚いたことにドラキュラになつた。かの串刺公がこのような戦に現れるとは思いもしなんだが…是非征服してみたくなつた」

「私を征服すると云つのかイスカンダル？」

「無論だ!!」

アーカードは嬉しそうに囁く。

「集え我が同胞よ!! 今宵我らはかの伝説のドーラキュラに勇姿を示す!!」

ライダーを中心に光が展開されました。

それは私達をも飲み込んでいきます。

気づけば私達は果てしない砂漠にいました。

砂塵が舞い、現れるのはイスカンダルの臣下達。

槍を誇り高く天に向け、王の言葉を待つてゐるようです。

アーカードはその光景を羨望の目で見つめています。

「敵は悪逆非道の卑刺公。相手にとつて不足なし!! いざ益荒男（ますらお）たちよ伝説の怪物に我らの霸道を示そぞぞ!!」

剣を掲げるライダーに答える臣下達。

その声は大地を震わせました。

「アーララララライイイ!!!」

剣を振り下ろすと同時にイスカンダルの軍勢が進軍を始めました。

圧倒的な数。

あの物量で押し切られれば私達など一溜りもないでしょう。

ならばその物量すら超える力を使わせてもらいます。

「拘束術式零号を開放してください・・・歌いなさいアーカード」

「・・・認識した」

アーカードがふうっと息を吐きました。

始まります。

全てを崩壊させる歌が。

「私は——ヘルメスの鳥」

アーカードの前に現れる棺。

その蓋が徐々に開いていきます。

「私は自ら羽根を喰らひ。・・・飼い、ならわれる」

来ます。

河が来ます。

死の川が。

死人が舞い。

——地獄が歌う!!

棺の隙間から出現する無数の目。

「あ、なんだよあれ!!」

アーカードは形を無くし河となる。  
大地を地で染め上げる河となります。

「全軍備えろ!!」

これが吸血鬼アーカード。

死とは魂の通貨、命の貨幣。

命の取引の媒介物に過ぎません。

血を吸つことは命の全存在を自らのものにする」と。

死の河から次々と現れる亡者たち。  
それは明確な形となつて現界します。

「カザン…・イヨニチヨリ軍団。貴様はそんなものまで喰らつたと言  
うのか!! 道理で死なんわけだ道理で殺せぬはずだ

!! 貴様は一体どれだけの命を持つてゐる!! どれほどの命を吸つた  
!!」

「…・ワラキア、公國軍!! お前は自分の兵、自分の家臣、自分の領民  
まで…・・・なんてやつだ!! 悪魔だ!!」

河の底から現れる黒い甲冑の騎士。

背中のマントはボロボロです。

それを堂々と靡かせるこの男こそ本当の伯爵——アーカード本体  
です。

両手を広げるとアーカードの脇に数えきれないほどの騎兵が姿を  
表しました。

その手には槍を持っています。

馬が声をあげ、騎兵たちは怨嗟の声を上げイスカンダルの兵に向  
かっていきます。

「アアアララライイイイイイ!!!

交じり合つた二つの軍団。

乱戦の中ライダーはまっすぐに亡者たちを切り裂き、踏み砕き、打  
ち破つて猛進してきます。

ライダーの軍勢が半分ほどになつた頃、ライダーは私達にたどり着  
きました。

「たどり着いたぞ吸血鬼!!」

「見事だ我が仇敵よ。ならばその剣を突き立ててみせよ!! 奴らのよう  
に「——」の私の夢の狭間を終わらせて見せろ!!」

ライダーの剣をアーカードの大剣が打ち払いました。  
そしてアーカードは大剣で馬の足を切り落としてライダーとウ  
イバーさんを馬から降ろしました。

アーカードはその隙に私を抱えて距離を取りました。

「語るに及ばず!! 貴様は國も領地も領民も愛するものさえ失った!! だ  
が余には全てある!!だからこそ貴様を終わらせるのは余の責務でも  
ある!!」

ライダーの世界が崩壊していきます。  
私とアーカード、そして殺しきれなかつた亡者たち。  
それに対するはライダーとウイバーさん。

「・・・ウェイバー・ベルベットよ。臣として余に使える氣はあるか?」

「貴方こそ・・・貴方こそ僕の王だ。貴方に仕える。貴方に頼ぐ。ど  
うか僕を導いて欲しい!! 同じ夢を見させて欲しい!!」

「うむ、よからづ。夢を示すは王たるよの勤め。そして王の示した夢  
を見極め後世に語り継べのが臣たる貴様の勤めである!!」

ライダーはニカツッと笑います。  
まるで最後を悟つてこるかのよつこ。

「生きるウェイバー。全てを見届けそして生きながらえて語るものだ。

貴様の王のあり方を——のイスカンダルの疾走を!!

ウエイバーさんは顔を逸らして涙を流しています。

ライダーは頷いて剣を振りました。

現れる牛車。

それに乗つてライダーは手綱を引きました。

「アーカードアーカードアーカードライイイイイイイ!!!」

雷と共に亡者達を退け向かってきます。

牛は血に塗れながらも進み続けます。

正面から堂々と征服するライダー。

アーカードは懐から2丁の銃を取り出して連射します。

同時にアーカードの身体の一部が狗となり向かっていきました。

狗が牛の一頭に喰らいつき離しませんが勢いは衰えません。

もう一頭に向けて連射される弾丸は弾かれつつも何発かは牛の身体を捉えています。

吹き飛ばしつつも進むライダーを横から亡者騎士達が襲いかかりました。

河から絶え間なく出現する亡者たち。

2頭の牛は足を取られ動きが鈍りました。

剣を必死に振り亡者を倒していくますが速度の落ちた牛車に掴みかかる亡者たちによってライダーは牛車から引きずり降ろされました。

ライダーは牛に群がる亡者たちを無視してアーカードに向けて走りだしました。

斬りつけては前へ前へ前へ前へ前へ。

アーカードの容赦のない射撃がライダーの腕、足、脇腹に突き刺されます。

けれど止まりません。

ついにはアーカードにたどり着きました。

「うおおおおおお!!」

ライダーは剣を振り下ろしました。

アーカードの腕が切り裂かれ左腕が落とされました。

そして剣を正面に向けて突き出しました。

その先はアーカードの心臓です。

ですが・・・その剣はアーカードの残った腕に掘まれました。

「イスカンダル。お前に倒されても良かつた。あの日なら一あの日暮れの荒野なら。お前に心臓をくれてやつても良かつた。でも、もはやダメだ。・・・お前に私は倒せない。化物を倒すのはいつだって人間だ。人間でなくてはいけないのだ!!」

アーカードの左腕が再生し、ライダーの心臓に突き刺さりました。ライダーの口からは夥しい量の血が流れます。

アーカードの顔は悔しさに満ちています。

私にはその表情が死を求めて叫んでいるように見えました。

「全く貴様・・・次から次へと珍妙な事を

「夢より覚めたか征服王?」

「そうさなあ。此度の遠征もまた存分に・・・心踊ったのぉ

「そうか・・・私も膨大な私の未来が終わり次第そちらへ向かつ。また戦争をしようではないか征服王よ」

「そりやあ・・・いいな」

目を閉じてライダーは静かに粒子となつて消えていきました。

アーカードは周りの「者」を全て吸収すると橋の向かい側に立っているウェイバーさんのところへ歩き出しました。

私もそれに付いていきます。

ウェイバーさんの顔は涙で濡れ、顔がクシャクシャになつています。

「小僧、お前は狗か化物か？」

「・・・違う、僕は人間で人の人の臣下だ」

拳を握りしめるウェイバーさん。

「だが小僧、お前がライダーの臣下ならば亡き王の敵を討つべきだと  
思うが？」

「お前に挑めば僕は死ぬ・・・それは出来ない。・・・僕は生きひとり命  
じられた!!」

「ふつ・・・やはり人間は素晴らしい。その心を忘れぬことだ人間」

アーカードは身体を翻しました。

その顔は喜びに満ちています。

聖杯戦争終了まで後少し。

私は決意を新たにして決戦場へと向かいましたー。

解説

Q ライダーの遙かなる蹂躪制覇（ヴィア・エクスプレグナティオ）が途中で飲み込まれてしまつたのは何故？

A、令呪3つで「必ず勝て」という命令をされていますが代わりに魔力を補給できません。さらに、最初に王の軍勢（アイオ

「オノ・ヘタイロイ」を使用しました。王の軍勢は起動に莫大な魔力を必要とします。一度展開すれば維持魔力は少なくて済みます。

みますが、長時間戦っている為（軽く流しましたが）相当の魔力を消費しています。

また、その後に遙かなる蹂躪制覇を使用した為ランクA+からB程度に下がっている物と考えられます。

そこから更にアーカードの狗、弾丸を受けて弱つた所に亡者達による攻撃があつたため飲み込まれてしまいました。

Q 死の河を使ったのに腕が再生したのは何故？

A、吸血鬼が持つ能力だからです。命のストックとは関係がありません。

## ただいま伯爵

順番にライトが点灯していく部屋の全体が見渡せるようになります。

真っ白な空間に佇む真っ黒な存在。

言峰綺礼。

聖職者でありながら人の不幸を笑う男。

そのことに愉悦を感じる男。

『フッ』と不敵に笑い十字架のネックレスにキスをしていました。

次の瞬間どこからか剣を取り出しました。

持ち方が独特で右左に3本ずつ指の間に挟むように持ち、手を交差させています。

距離があるはずなのですが一瞬にして距離をつめました。

アーカードは懐から白銀、黒銀の銃を取り出すと、白銀の銃を発砲しました。

それを剣を重ねてガードしました。

6本の剣は碎けましたが言峰は今だ勢いが止まりません。

今度は黒銀の銃を撃つと身を屈めて回避、どこからか取り出した6本の新たな剣をもつて接近します。

「はあああああ!!」

滑るように接近し剣を突き出しました。

アーカードはそれを避けずに黒銀の銃を撃ちます。

言峰の左腕に命中した弾丸は言峰の腕の機能を奪うには十分な威力です。

対してアーカードに刺さった剣は大した威力ではないと、私はそう思っていました。

お互いに距離をとつて様子を見ているようですがアーカードの様子がおかしいです。

「・・・なんだと？」

「やはり吸血鬼にはこれが有効なようだ」

「・・・なるほど概念武装か。私の概念を上書きするとはな。この世界には私を倒しうるものが存在するようだ」

「私程度では突き刺すのが精一杯だがな。令呪のバックアップがあるてこの程度。一流になれないことをこんなにも悔やむ田代が来るとは思いもよらなかつた」

アーカードは白銀の銃を発砲しますが言峰の服にはじかれてしまします。

その隙に言峰は距離を詰めて拳を突き出します。

ありえないことに吹き飛び壁に叩きつけられました。

もはや人間の領域を超えた一撃の後に言峰は3本の剣を再び取り出しアーカードに投げつけました。

「人の身で良ぐゼ！」まで練り上げた・・・だが、足りない!!

アーカードは投げられた剣を銃で全て撃ち落とし最後に接近してくる言峰に発砲しました。

右肩に命中した弾丸。

これで剣を持つことはできません。

膝を付く言峰にゆっくりとアーカードが近づいていきます。

「なぜ私に挑んだ？負けることなど分かりきつていたはずだ」

「ふつ、本来であれば衛宮切嗣と戦つはずだったのだがな・・・欲が出たようだ」

他人の不幸を観たいという欲望以外に欲などあつたのですか。  
自嘲気味に言峰は息をつきます。

「聞いたかつたのだよ。神に狂信し、愛も夢も失つたお前が何を手にしたかを」

「くだらないな。お前はおもちゃを手に入れてはしゃぐだけのクソガキだ。クソガキに教えてやろう。お前の進む道には何も残らない。何も得られない。最後は惨めに死ぬか、人間であることに耐え切れず化物になるだけだ」

「ふつ、なるほど本当にくだらないな」

アーカードは銃の引き金に指を置くと戸惑いなくその指に力を加えました。

弾丸は言峰の心臓と捉え、言峰綺礼は床に倒れました。

ぶちまけられた血。

倒れた言峰にアーカードは黄色の槍を突き刺しました。

その槍には腕が残つてあり私にはそれが歪な十字架に見えました。

「言峰——お、お前たちは!!」

突然現れた衛宮切嗣。

手に持つた銃はすでに私に向けられていました。

「・・・あつ」

撃たれた。

私は人事のようにそれを感じました。

ああ、やっぱり私は間違つていたのでしょうか。

一体どこの間違えたんでしょうか。

アーカードのマスターになつたこと?

舞弥さんを助けたこと?

アイリスフィールさんを吉峰に渡したこと?

それとも・・・おじやんを吸血鬼(ばけもの)にしてしまつたこと?  
?

走馬灯のように駆け巡る後悔と疑念。

そして天井に穴が空き私は黒い泥に飲み込まれました。

「おかえり桜ちゃん」

雁夜おじやんが微笑みながら私を迎えてくれています。

「今日は遅かつたのね桜。今日は雁夜くんが来るから早く帰つてきてってって言つたのに」

「え、お母さん?」

「桜見てみて!!これおじやんが買つてくれたのよ!!似合つてしまつ?」

「姉さん?」

「桜は私の血膾の娘だからな。こいつお土産で桜の氣を呑いつつして  
も私が許さんぞ」

「お父さん。」

――――は貴方の理想の世界。

理想？

——そう、本来はありえない世界。でも私はそれを叶えてあげられる。奇跡を起こしてね。

本当にこんな幸せな世界にいられるの？

——もちろんだよ。聖杯は君にこそふさわしい。まあ、僕と契約して聖杯の扱い手になつてよ!!

「リリィは・・・ビリー。」

見渡す限りの瓦礫の山。

荒廃しきった世界に私は一人存在していました。  
瓦礫の奥から垣間見える明かりは火災でしょうか。  
思い出したように胸に手を当てる鼓動があります。  
私は死んでしまったのでしょうか。  
歩けども歩けども聞こえる助けてと叫ぶ声。  
道に転がる人間だったもの。  
特別何かを感じるわけではありません。  
今はただおじさんの安否を確認したいだけです。

「アーカード、いないんですか？」

試しに呼んでみましたが返事がありません。  
婦警さんも見当たりませんし一人とも消えてしまつたのでしょうか。

間桐邸にたどり着くまでに衛宮切嗣を見かけましたが形を保つて  
いるだけで魂が抜けていました。  
宛てもなく彷徨うさまは撃たれた私から見ても異様でした。

何はともあれ間桐邸にたどり着きました。

玄関の鍵を開けて私の部屋に入ります。

ベッドの上に寝かせていたおじさんは未だ眠つたままでですが、様子からグールになる心配もなさそうです。  
やつと、やつと終わりました。

私は雁屋おじさんの横に入り込んで田を閉じました。

——良い夢が観られるようにお祈りを、エイメン。

あれから十年が経とうとしています。

聖杯戦争が終わつた一週間後に来た魔法使いさんにお話という名の事情聴取を受けまして、過去のことも話したら『じゃあ、戻してあげる』と軽い言葉と共に私の体が間桐に来る前の姿に戻つていました。

この矛盾のしわ寄せがいつ来るのか今更ながら堪える毎日です。

さて、現在私は魔法使いさんに紹介して頂いた魔法使いさんのお姉さんの下で魔術を習っています。

間桐の『吸收』は失われましたので私が本来持つっていた『虚数』を伸ばしているのですが扱いが難しいです。

それでも師匠からは○×サインを頂きましたので少し自身を持つていただります。

それから雁夜おじさんですが、めでたくドラキュラになれました。もちろん血は私のものしか飲ませていません。  
他の人の血を吸つたら絶対に許しません。

高校生活ですが、特に問題もなく過ごしています。

たまにすれ違う遠坂先輩に胸を恨めしそうに見られたりするくらい

いですね。

婦警さんの胸を押んだかいがありました。

今日も『道部の部活が終わって帰路に着きます。  
すっかり夜も更けてしまっておじさんには迷惑をかけっぱなしです。

元の姿に戻ったとはいえ日中に買い物は大変でしょう。  
せつかく衛宮先輩からお料理を習っているのに作って上げられないなんて・・・。

アーカードの消息は分からないます。

聖杯が破壊されたことで消滅してしまったというのが私とおじさんの考え方です。

食事を済ませて自室のドアを開けました。

昔とくらべて私物の増えた部屋の椅子に誰かが座っています。  
——まさか。

「フッフッフ・・・フフフフフッ」

「アー、カード?」

「その通りだ桜」

「今まで何をしていたんですか?」

「殺し続けていた私を。聖杯の泥に飲み込まれていく私の中のものに  
引っ張られぬように殺して殺して殺し続けた。そして唯一になった  
私は受肉を果たし今ここにいる」

遅いですよ。

待つていたんですよ。

貴方にありがとうございましたと伝えたかった。  
私を護ってくれてありがとうございます。  
でもまずは言いたいことがあるんです。

「―― おかえり伯爵」

「―― ただいま伯爵・・・いや間桐桜」

わたしの物語は続いていきます。  
きつとこれからもずっと。  
雁夜おじさんとアーカードと共に。  
ずっとずっと――。

正義の味方

冬木の大火災が人々の記憶から少しづつ忘れられていく頃。

衛宮切嗣と養子の衛宮士郎は縁側で満月の空を見上げていた。

二人は一人分ほどの距離を空けて座っている。

虫の鳴き声がやけに大きく感じられ、士郎は養父である切嗣に話しかけた。

「おい・・・おい、じいさん」

「ん?」

士郎の声に遅れるように相槌を返す切嗣。

士郎はいつも疲れたような顔をしている切嗣をじいさんと呼んでいた。

年齢には似合わない呼び方だが切嗣はそれを正そうとはしなかった。

本人もその呼び方を気に入っていたのである。

「寝るなじゅちゃんと布団に行けよ、じいさん」

時々外国に行つては辛そうな顔で帰つてくる養父が最近になつてそれを止め一日中家にいるようになつた。

病氣かと思ったがそれでもないらしい。

士郎が聞いても「これは僕に与えられた罰なんだ」と言つて話してくれない。

納得はできなかつたが深く聞くのも躊躇われた。  
それだけ切嗣の顔は疲れきつていたのだから。

「ああ・・・いや大丈夫だよ」

いつも同じ答えが返つてくる養父。

士郎は月に照らされた養父の顔を覗き込んだ。

「子供の頃・・・僕は正義の味方に憧れていた」

「・・・何だよそれ。憧れてたって・・・諦めたのかよ?」

士郎は切嗣に憧れていた。

何しろあの大火災から自分を救つてくれたのだ。  
養子にまでしてくれたこの人が弱氣を吐くところなど見たくはなかつた。

「うん・・・残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなこと・・・もつと早くに気づけばよかつた」

後悔を口にする切嗣。

士郎は幼いながらこの男の道が険しく辛いものだつたことを感じた。

「そつか・・・それじゃあしうがないな」

「そうだね・・・本当にしうがないな」

気まずくなつてしまつた空氣を紛らわせるために切嗣は大きく息を吐いた。

「ああ・・・本当に良い月だ」

「うん、しょうがないから俺が代わりになつてやるよ」

士郎は自分を救つてくれた切嗣を心だけでも救つてやりたいと思つた。

これで救われるなら良いこと。

「ん？」

「じいさんは大人だからもう無理だけど俺なら大丈夫だ。任せろつて。じいさんの夢は俺が叶えてやるよ」

切嗣の体から力が抜けていく。

最後に思い残したことこの少年はやつてくれる。

それだけで彼をこの世界に留めていたものは清清しいほどに綺麗に消えた。

「ああ・・・安心した」

切嗣の瞳はゆっくりと閉じられていく。

これでやつと終わると。

微動だにしない切嗣を不審に思い士郎は養父に話しかけた。

「おい、じいさん？」

返事はない。

目を閉じたまま全く動かない。

そんな二人の間に一人の女性が割つて入る。

「士郎・・・切嗣はとても傷ついて、とても苦しつんだの。だから休ませてあげて」

「義母さん」

二人を抱きしめる優しく細い腕。  
その瞳からは涙が流れていた。

いつもクールな義母が泣いている。

土郎は困惑していた。

「よかつたね切嗣。やっとあの人の元に行けるね。・・・行つてらつ  
しゃい。土郎は私に任せて」

眠つてしまつた義父の顔は子供のように安らかな笑顔だった——。

生まれ変わつた二人、始める二人

間桐桜の朝は早い。

午前5時に起床。

おきて直ぐに少し茶色の入つた黒髪にブラシを通して、髪をセット。トーリボンをつけてキッチンへと向かう。

指先にナイフをあて血を絞り出す。

最初は大変だつたが今では慣れたものだ。

指を消毒して絆創膏を巻くと一人分の朝食に取り掛かる。

おじさんである雁夜は血をあまり必要としなかつた。

だが抑えすぎると大変なので毎日朝食時に少しだけ混ぜていた。

雁夜も気づいてはいるのだが言つても聞かないので諦めている。  
特に今日は多めに入つていて。

なぜならば昨日雁夜と初めての交換ができたのだ。

本来であれば桜は初めてではないが『青』の魔法によつて体が遠坂の頃まで遡つているため膜は残つていた。

そのため今日の桜のテンションは恐ろしいほど高い。

「おはよう桜ちゃん。朝から凄い豪勢な食事だね？」

「おはようございます雁夜さん。今日は私と雁夜さんが契りを結んでから始めての食事ですか？」のくらい当然です。私の愛（血液）もたっぷり入りますから味わって食べてくださいね」

「あ、ああ」

雁夜は若干引いていた。

昔から可愛いと思っていたし、葵との事を忘れさせてくれたのは他でもない桜だ。

可愛いとも思つし大事にしたいとも思つていい。いつかは結婚をしても良いとすら思つていい。

だが昨日のこと思い出すと雁夜の体は震える。

吸血鬼の体になってしまった雁夜だが生活リズムは人間と変わらない。

したがつて昨夜部屋で横になっていた。

意識が薄れようやく眠りにつけると思った矢先事件は起きた。そう、部屋に桜が入ってきたのだ。

学生らしく瑞々しくも張りのある肌を惜しげもなくむきだらけの桜。胸は昔とは比べ物にならないほど成長した。

雁夜が異変に気づいたのは桜の中に入った時だ。

目覚めると同時に果ててしまつたのは内緒だがそのときに目覚めたのだ。

妖しく光る妖艶な瞳に飲み込まれてしまつた雁夜は為すすべもなく何度も果てた。

気が付けば朝。

やつてしまつたという後悔の念が彼を攻め立てた。

おじと姪。

血の繋がりはないがこれはまざい。

雁夜はなかつたことにしてやつ過いだつと思つていたが桜はこんなにも喜んでいた。

思わず雁夜は頭を抱えた。

「雁夜さん？ 顔色がよくあつませんけど・・・」

そしてこの呼び方だ。

昨日までは雁夜おじさんだったはずだ。

それが今日になつて突然雁夜さんに変わった。

もちろんあちらからとは言え雁夜も責任はとるつもりだ。

しかし昨日まで童貞だった雁夜にとつてこの急激な変化は負担になっていた。

鼻歌まで歌う彼女を誰が止められようか。

結果雁夜は並べられた食事に集中するしかなかつた。

「ふふふ、そんなに急いで食べなくとも大丈夫ですよ。あ、それとこれ渡しておきますね。必要なことは全部書いてありますから後は雁夜さんの名前だけですよ」

「・・・えつ？」

雁夜の前には一枚の紙。

名前の欄には『間桐桜』の文字。

もう一方は空欄になつておりそれ以外の場所は既に埋められていた。

左上にはこう書かれている。

「・・・婚姻届？」

「はい、そうですよ。・・・まさか書かないなんて言いませんよね？」

全身から溢れる汗。

これに記入すれば間違いなく今日桜は提出するだしつ。

雁夜の手に持った箸はブルブルと震える。

対する桜は笑顔。

それも今まで一番の笑顔。

雁夜の脳裏にある言葉が聞こえた。

『男は諦めが肝心』

「あ、忘れていました。はい、ボールペンです」

「あ、ああ・・・」

渡されるボールペン。

雁夜の手は依然として震えたままだ。

汗が頬から落ちてテーブルに落ちる。

「酷い汗ですね・・・どうしたんですか?」

雁夜は顔を上げることができないでいた。

きっと今の桜の顔を見てしまえば終わってしまつ。

叔父と姪という関係が本当に終わってしまった。

「・・・やっぱ、ダメですよね・・・私なんて」

「そんなことはない!!」

雁夜は顔を上げる。

泣いている。

桜が泣いている。

自分のせいで泣いている。

雁夜は苦悶を浮かべる。

そして立ち上がり桜を抱きしめた。

「『めんよ桜ちゃん』——いや、桜。結婚しよう。俺、意氣地なしだから  
や……迷惑かけてばかりだけど。絶対に幸せにするから!!」

「——はいっ!!」

抱き合つ二人。

そこには誰にも介入できない絶対的な愛があつた——。

忘れていた二人の絆

彼、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは聖杯戦争を生き抜いた。  
まずはそれについて語りたい。

片腕を無くしたランサーと魔術を一度と行使できない体になつた  
ケイネス。

ソラウはどうしてもランサーとの繋がりが欲しかった。  
故にケイネスを脅そと彼の所へと向かつたソラウ。

しかしケイネスには先約がいた。

そう片腕を無くしたランサー。

彼は片腕になつたせいで主を護れなかつたと悔やんでいた。

実際は両腕でも関係はなかつたのだが彼はそう思い込んでいたの  
だ。

ソラウは仕方なく話が終わるまで待つことにした。

「主よ、具合は如何ですか？」

「ふんつ、見て分からんのか？お前から見てさぞや無様な格好だろう

な。恋人を奪われ魔術師としての生涯すら終わつた。私に残されたのはこの令呪とぐだらないプライドだけだ」

ケインズは自暴自棄になつていた。

何でも持つっていた自分が今や全てを失い、加えてウェイバーのこと

を馬鹿にしていた事もあつて今の自分の惨めさを感じてしまつてい

たのだから当然かもしれない。

彼のプライドは人々に砕け散つていた。

「ケインス殿、自分を責めてはいけません。自分を責めたところで何

も変わりはしないのですから」

「氣休めを言つな！！！私が何故この聖杯戦争に参加したか分かるか

？」

「ケインス殿の権威をさらに高めるためでは？」

「それもある・・・だがそれだけではないのだ」

ランサーは立ち上がりケインスの顔を見た。  
そこには紛れもなくケインスの全てがあつた。

「私は・・・ソラウに認めて欲しかつたのだ。時計塔で天才講師として  
崇められても彼女はあの冷たい表情を変えてはくれなかつた。だか  
らこそ私は武功を上げたかつた。まだ見ぬソラウを見たかつたのだ。  
実際私は見たこともないソラウを見つけた・・・ランサー、貴様のお  
かげでな」

ケインスは皮肉を込めてそういつた。  
ランサーもうなだれた様子だ。

「だが、もう無理だ。愛を失い、職も無くし、私には何も残されていない。であればさつと死ぬのが道理だ」

「聖杯を・・・諦めたのですか？」

「諦められるはずが無い・・・。だが仕方ないだろ!! 私ではもう戦いぬけない。だからお前はソラウを護れ。令呪は全てソラウに渡す。だからお前はソラウだけ護りぬけ」

涙を流すケインス。

ランサーの瞳にも涙が流れる。

「何故お前までなくのだとランサー。ソラウはお前を愛している。私の事は良いからソラウを護つてやってくれ」

「それは・・・」

「できぬとは言わせぬ。お前の腕は一本だけだ。ならばその一本で彼女を護れ。私は・・・」

物陰に隠れていたソラウは息を呑んでいた。

いつもは気取つて自慢話ばかりの彼が実は自分の事を第一に考えていたのだ。

いつの間にかソラウの意識はケインスを追っていた。

「ケイネス殿。私はご存知の通り主君を裏切り最後には裏切られました。ですが今私は感動しております。私は初めて主君

から本当の信頼を頂けました。なればこそ私は貴方も護ります。このデイルムッド、片腕であつても必ずやお一人をお護り

いたします

ランサーの涙が廃墟の床に落ちる。

ケイネスの涙も留まることを知らない。

ランサーの右腕がケイネスの手を握る。

この方の命を必ず果たすと心に刻んで彼は外に歩き出した。

隠れるタイミングを逃したソラウはデイルムッドに見つかってしまい顔を赤くした。

デイルムッドは微笑んで横を通り過ぎていった。

ソラウは何知らぬ顔でケイネスの元へ歩き出す。

ケイネスは泣いている顔を見られまいと顔を背けた。

その様子がソラウには妙に愛おしく思えた。

「酷い汗ねケイネス」

「わ、私はどうなったのだ?」

「魔術回路がぐちゅぐちゅになつていてるわ」

「・・・そつか。ソラウ話があるのだが」

「いいえ話なんてしなくて良いのよ。貴方の気持ちはもう十分すぎるくらい分かってるから」

ソラウの唇がケイネスの唇を奪う。

ケイネスの目が開かれる。

一瞬触れるだけのキスだったがケイネスには永遠に思えた。

「愛しているわケイネス。今はまだダメかもしれないけどいつかきっと貴方だけを愛します。だから・・・待っていてくれますか?」

「・・・ああ・・・ああ・・・もちろんだともつ・」

抱き合つ一人をランサーはふつと満足げに微笑んだ。

これをきっかけにケインズとランサーはお互ひを信頼しあうようになる。

ランサーに思いを告げたソラウはすつきりした様子で楽しそうに笑いあう二人を眺めていた。

それはランサーがセイバーに倒されるまで続いた。

ケインズの提案で切嗣の協力者のことを探して上げたのが良かつたのかランサーとセイバーの戦いの前にギアススクロールを作成し、問題なく決闘が終わつた。

ランサーの最後は穏やかなものだつた。

ランサー死後もギアススクロールの呪いによつて殺されることはなく無事に国へ帰還を果たした二人は結ばれたそつだ。でもそれはまた別のお話――。

## 後日談2

「今日は本当に月が綺麗ですねえ」

コバルトブルーの瞳が闇に輝く月を見つめる。

今宵は最終決戦になる。

セラスの人間離れした思考がそれを確信していた。  
この戦いの果てに自分はどうするのだろう。

ドリキューリーナになつたばかりの彼女にとつてその問は些か難し  
い。

片手で抱えているハルコンネンを両手で抱きしめて視線を落とす。

「もう、来ちゃうんですね」

闇に紛れて一つの光がセラスを捕らえる。

常人では決して視認できない僅かな光。

それは僅かな音と共に滑走する。

「ふう・・・足止めできるのかな」

うつ伏せの体制になり抱えたハルコンネンを光に向けて構える。  
イメージするのは第三の目。

吸血鬼のみが持つアーチャークラス並みの視力。  
写るのは黒い男装のセイバー。

まだ距離があるためセラスには気づいていない。

「迷つても仕方ない・・・やりますっ!!」

ハルコンネンのトリガーが引かれる。  
慢心などありえない。

彼女のマスターの命令通り最初から全力で相手をしなければ彼女が倒されるのだから。

一発撃つてから直ぐに次弾を装填。

その間約1秒。

改めて構えるとやはりセイバーは持ち前の直感で回避していた。セラスは慌てる事無く一発目を発射する。

しかし、その弾もアスファルトを抉るだけで命中はしない。

セイバーは狙撃場所を特定したようで視線をセラスの方角に向いている。

直接がダメならとセラスはセイバーの走行ルートを予測して、三発目を装填する。

狙うはバイクの前輪の手前。

放たれた弾丸はアスファルトを抉る。

これにはセイバーも驚きバイクの前輪を穴にとられる。

当然猛スピードで走るバイクは慣性のまま後輪から縦回転を始める。

だがセイバーはこの程度では転ばない。

重心を上手く調整し後輪で着地したのだ。

そして前輪も大地に着けると再び走りだす。

「うわあ・・・ありえないでしょ」

セラスから渴いた声が洩れる。  
心なしか顔も引きつっている。

残弾は残り五発。

無駄撃ちは出来ない。

弾薬をもつと貰つておくべきだったと嘆きつつ状態を起こしてハルコンネンを肩に担ぐ。

「何やら物音がすると思えば「ウモリ」であつたとはな。 我の周りを飛び回るのを許可した覚えはないぞ」

セラスは受け身を考えず横へ飛ぶ。

金属がコンクリートを貫く音と煙が充満する。

眼前には黄金の鎧のサーヴァントーアーチャーが腕を組んで存在していた。

額を伝う汗を腕で拭いハルコンネンを構える。

「ほひ、コウモリの分際で我の裁きを逃れるとはな。ならば我を興じさせてみよ。もしかすると我の寵愛に値するかも知れんぞ?」

アーチャーは機嫌良さそうに背後の空間を歪ませる。

飛び出す無数の武具。

一つ一つが必殺の宝具。

「む、無理イイイイイ!!」

「何処へ行く雑種!!」

セラスは一瞬の間もなく背を向ける。

飛来する宝具を躊躇弾を装填。

振り返り後ろに飛びながら引き金を引く。

弾は剣に阻まれ勢いを無くしたがアーチャーの視界からは逃れた。

舌打ちしたアーチャーが踵を返して靈体化したのを見てふうっと息を吐く。

「ああ・・・死ぬかと思つたあ。すいませんマスター。セイバーは止められませんでした」

時間稼ぎのつもりがとんだ災難だ。

アーカードに怒られるのを想像してブルッと身を震わせたセラスは急いで決戦場へと走りだした。

「アイリス、フィール」

---

「コンサートホールに到着したセイバーが眼にしたのは黄金の杯。すなわち聖杯があった。  
あれが守ろうとしたものだと誰が思おうか。  
誰を犠牲にしても絶対に過去をやり直すと決めた決意が揺らぐのをグッと堪える。

これさえあれば願いが叶つと、そう信じて。

「遅いぞセイバー。『ウモリなどと戯れるにしても』の我を待たせるとは不心得も甚だしい」

「アーチャー……」

コンサートホールのステージは穴が開いておりその手前でアーチャーは不敵に嘲笑う。

薄暗い場所にも関わらずアーチャーの輝きは轟る」とはない。  
むしろ一層艶やかさを内包しているようだ。

「ふふ、何といつ顔をしている。まるで食えた瘦せ狗のようではないか？」

「そこを……どけ。聖杯は……私の、ものだ!!」

この戦いを征すれば聖杯が——あの口の願いが成就される。  
ブリテンの悲劇。

自分ではない王にふさわしい者が剣を取りあの悲劇を繰り返さない為了に。

普段冷静なセイバーの顔はアーチャーが言つ痩せ狗に似ていた。

「——っ！」

迫る武具を躊し席の背もたれに足を乗せてそのままアーチャーへと飛びかかる。

風王結界に隠された剣がアーチャーを襲う。

しかしアーチャーは悠然と腰に手をあて立っている。

取つたと思われたそれはアーチャーが王の財宝から飛び出した剣によつて阻まれた。

そしてアーチャーは空間から鍵を取り出す。

——曰く世界を切り裂き天地を切り開いた創造と破壊の剣。それが今抜かれた。

「そ、それは!?」

セイバーの眼が見開かれる。

剣とは思えぬ円環の剣。

回転を繰り返すそれはドリルのよつとも見えた。

「——のまま射ち合つても良いがもしもが有ると面倒だ」

アーチャーは前面を埋め尽くす大量の武具を展開しセイバーを会場から吹き飛ばす。

その際セイバーの左足に剣が突き刺さる。

足が止まつたセイバーを蹴り飛ばし外へと出る。

しかしセイバーはアーチャーから視線を外さない。向き合う二人。

少しの沈黙の中先に動いたのはアーチャー。

手に持つた剣が高速回転を始める。

吹き出る力の奔流。

セイバーの聖剣を超える宝具の開放が今為されようとしていた。

「田覓めよヒア、お前に相応しき舞台だ。…セイバーよせめて相殺  
くじこはして見せよ」

「くつ、良いでしょ!! 我が願いはそのような物に負ける道理はない  
!!」

風が弾け顕になる黄金の剣。

比類なき伝説の剣に光が収束する。

約束された勝利の剣。

伝説に語り継がれる最強の聖剣が光を放つーー。

「エクスツ!!」

「エヌマツ!!」

「カリバアアアアアア!!!」「エリッシユツ!!!」

2つの絶対的力はお互いを認めず拮抗する。  
だが徐々に均衡は崩される。

飲み込まれていく光。

セイバーの表情が苦悶に変わる。

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

「ふつ」

セイバーの叫びは虚しく闇に消えていく。  
そしてセイバーは世界最古の前に敗れる。

「か・・・くつ、か・・かはつ!!」

込み上げる血の塊。

吐き出しても次から次へと込み上げる。

霞む眼はまだと訴えるが体は動かない。  
後ろでまとめた髪も解けている。

「ふ、フフハハハハハハッ!! これが人類の願い? 最強の聖剣だと? 笑わせてくれるではないかセイバー!! だが、妾執に落ち地に這つて尚お前という女は美しい。剣を捨て我が妻となれ!! 奇跡を叶える聖杯などそんな胡乱な物に執着する理由が何処にある? 下らぬ理想も誓いとやらも全て捨てよ。これより先は我のみを求めるのみの色に染まるが良い。さすれば万象の王の元にこの世の快と悦の全てを賜そう」

嘲笑うアーチャー。

セイバーはフラつきながらも立ち上がりアーチャーを睨む。

「貴様は・・・そんな戯言の為に、私の聖杯を奪うのかつ!!」

飛来する剣。

それを弾ぐが勢いを殺しきれず倒れる。

「お前の意志など聞いておらぬ。これは我が下した決定だ。さあ、返答を聽こうではないか」

「こ、とわる・・・断じーー」

今度は斧がセイバーの足に食い込む。  
現界に近いセイバーは痛みに藻搔く。

「恥じらつあまり言葉に詰まるか・・・。良いぞ、何度も言い違えようとも許す。我に少くす喜びを知るにはまず痛みをもつて学ぶべきだからな・・・ふつ」

ボロボロのセイバーを更に痛めつけんと展開される王の財宝。セイバーは息を飲む。

「どうした？ 答えぬならば答へさせんしかないな」

槍を手で引き抜きセイバー田掛けて投擲される。動けないセイバーは歯を噛みしめる。だが予想された痛みはやつてこず、槍はあらぬ方向へと飛ばされる。

聞こえた銃声。

そこにはサファ イア ブルーの瞳の吸血鬼が荒い息で銃を構えていた。銃口から硝煙が出ていてことから槍を弾いたのが彼女だと理解できた。

アーチャーの愉悦の表情が怒りの表情へと変わった。

「ハウモリよ・・・よほど死にたいらしいな

「いやあできれば死にたくないなあつて思つたりして」

「な、何故貴様が私を助ける？」

セイバーの間にうーんと首を傾げて、思いついたとセラスは言つ。

「私つて婦警だつたんですよ。だから弱つてる女性を見捨てないことに出来ないです」

ビシツと敬礼するセラス。

その顔に嘘は見られない。

唖然とするセイバー。

逆にアーチャーは不愉快そうに鼻を鳴らす。

「あれは我の物だ。我が所持品をどう扱おうと鬼や角言われる筋合いはない。王に対しても大言を吐いたのだ。もはや見逃しじせんっ！」

セラスは死を回避しつつセイバーを抱き上げて草陰の安全な場所に移す。

アーチャーの元へと戻ろうとするセラス。

咄嗟にセイバーは服を掴んだ。

「え、えーと？」

「…私も多少動ける程度には回復しました。不本意ですが今だけ共闘を申し込みます」

「は、はいっ!!頑張りましょうね!!」

セイバーの手を取つて起き上がらせる。

そして左右に分かれた。

二人のいた場所に爆音とクレーターが出来る。

「おのれっ!!

「ハアアアアアアアア!!!」

「セイバーかつ!!」

剣を躲し距離を取るアーチャーの背中から銃声。

アーチャーの右腕に命中した一発の弾丸はそのままアーチャーの腕をもぎ取る。

手に持っていたエアが地面に落ちる。

「グウウウウウウ!!」

「逃がしません!!」

セイバーの追撃を武具の放出で逃れ左腕に剣を持つ。  
その間に装填したセラスがアーチャーに照準を合わせる。

「次弾敵右腕!!」

「ヤー!!

「クッ!!

飛び上がり弾を回避。  
狙撃場所に目掛けて武器を降らせる。  
点ではなく面の攻撃。  
セラスは為す術もない。  
幸い両足と腹と右腕だけで済んだが長くはもたない。

「はあはあはあ

「とく逝ね」

「これで最後です」

ハル「ンネンの弾丸は惜しくも的を外れセラスに魔の手が差し掛かる。

爆発と共に土煙が上がる。

やがて煙が晴れたがそこには誰もいない。  
アーチャーの顔に余裕が戻る。

「さて、多少面倒はあつたが元に戻ったなセイバー。だが我的手を煩わせたのだ。相応の教育が必要のようだ」

「巫山戯たことを。これで最後です、アーチャー」

聖剣が再び光を集め。

もはやセイバーに残された魔力は少ない。  
この一撃で決まらなければすなわち敗北。  
これは不味いと焦るアーチャー。

しかし助けは以外なところから現れた。

ボサボサの黒髪、黒いコート。

感情を感じさせない濁つた瞳。

セイバーのマスター衛宮切嗣が現れたのだ。  
セイバーも気がついたようで一瞬だけ視線がそちらに向く。  
その隙にアーチャーはエアを拾い真名を開放する。

「なんてタイミングに・・・!!」

焦るセイバーを見ようともせず衛宮切嗣は自身の腕に刻まれた令呪に語りかける。

「そ、そうか!! 切嗣、令呪で敵を一ーアーケードを倒せと命令してください!!」

「衛宮切嗣の名のもとに令呪を持つて命ずる

勝つた。

セイバーは勝利を確信した。

お互いに睨み合つて聖杯はめりくへつと言つた。

「セイバーよ。宝具にて聖杯を・・・破壊せよ

「なつ!!

「ば、馬鹿な何のつもりだ雑種!!」

抗うセイバー。

車線上にいるアーチャーは驚きを隠せない。  
そして二人のサーヴァント達の男の言葉を信じられずといった。  
聖杯を手にする絶好のチャンスを捨てるとこつのだ。  
正気の沙汰ではない。

だが衛宮切嗣は止まらない。

「第三の令呪をもつて重ねて命ずる」

「何故だ切嗣!! よりともよつて貴方が何故!!」

震える腕。

セイバーの意志とは関係なく聖剣はその力を開放しようとしている。

「おのれえ!! 我が婚儀を邪魔立てするか、雑種!!」

「セイバー、聖杯を破壊しろ」

「やめらうおおおおお!!

「エヌマ・エリックショ!!」

振り下ろされる聖剣。

押されてはいるが拮抗する乖離剣。

だが令呪のバックアップもありエクスカリバーの威力は通常のそれを遙かに上回る。

押されていくアーチャーは背後に武具を展開する。徐々にではあるが相殺していく。

「！」のような結末を認めるとでも三つののか!!」

「あはは・・・残念ですけどこれで終わらせます、我が主様の為に」

「き、貴様アアアアアアアア!!」

弾丸はアーチャーの頭に吸い込まれるように命中してアーチャーの頭を吹き飛ばした。

必然的にエアの力は失われエクスカリバーがセラスを飲み込む。

こうして聖杯戦争は幕を閉じたーー。

-----

リクエスト その後の遠坂家

遠坂凜。

彼女には目標がある。

それは父のような優雅で気品のある魔術師になることだ。

だがそれを脅かす事態が起きてているのも事実だ。

そう思つて窓の外を見るとやはりいつものように彼女がそこにい

た。

凛と同じ髪の色だが顔立ちは柔らかな少女。かつて遠坂であった少女が無表情に門の前に立つてゐる。

「あの子、また来てる」

間桐の当主が亡くなつたとは聞いたが毎日見に来るのは一体何故だろうか。

凛は最初帰つてきたのだと歡喜したものだが桜は無表情で違うと明言している。

そして更におかしいのが母の葵だ。

桜の顔を見るだけで発作を起こして癡狂する。

明らかに異常であるため足の怪我と何か関係があるのかと思い、桜に問い合わせたが私がその怪我を負わせたわけじゃないとこれまで否定した。

葵も発狂の原因を自覚しているが頑として話そとはしない。何かに怯えているようだが桜を怯えるといつのも分からぬ。常識的に考えて小学生に怯える大人などいないからだ。

確かに桜も魔術師の家系なのだから唯の小学生ではない。しかし仮にも母親なのだ。

ここまでひどい事をするとは思えない。

謎は深まる一方で、凛は毎日を悶々と過ぐしている。

この謎が分からなければ優雅にもなれそうにない。

溜息を吐く凛を見つけた葵は車いすに乗つて凛に手を振る。

「あら、凛ちゃん…ああ!!!!!!」

「ええ、ひよ、ひよひよと落ち着いてーー」

「じめんなさごめんなさいごめんなさいごめんなさい

「ごめんなさい!! 許してお願い!! もう一度としないから!! お願い!! お願  
願いよおおオオおお!!!」

母の発狂。

まだ幼い凜にはキツイ。

世話役として派遣された人が慌てて駆け寄ってきた。

視線を門へと向けてまたかと溜息を吐く。

葵の車いすを押して部屋に戻つていった。

凜はそれを見送つてまた視線を門へと向ける。

ちょうど桜も凜を見ていたので視線が合つ。

見つめ合うこと30秒。

桜は凍えるような笑みを浮かべて帰つていった。

凜は背筋に薄ら寒いものを感じて母の元へと歩いて行つたのだつ  
たーー。

FIN

## 遠坂と老紳士の日常

「お嬢様、朝でござります」

「後、五分・・・」

午前6時30分。部活の無い学生でもそろそろ目を覚ます頃、少女はだらしなく布団に包まっていた。その彼女の寝台の側で険しい顔をしている老紳士。このやり取りはかれこれ30分続いている。痺れを切らせた老紳士は指を僅かに動かすと腕を真上へと振り上げた。それだけで少女を包んでいた布団は宙を舞い、包まっていた少女もまた宙を舞い、ベッドから落ちた。顔から落ちた少女は鼻を押されて、般若のような表情で老紳士を睨む。老紳士は慣れた表情で一コやかに朝の挨拶をする。

「おはようございます。よつやくお目覚めのよつですね。朝食の準備が整つてありますので早く御越しください」

「・・・貴方はまず謝ることから始めるべきだわ」

学園一の美少女で文武両道の高嶺の花。遠坂凜は低血圧の影響でまるでゾンビのように伸びながらそう呟いた。絹にすら勝る黒く美しい髪を床に横たえ、前髪から覗く蒼い瞳は宝石に例えられても不思議ではないが、この状態では恐怖を煽るものでしかない。凜はゆらりと立ち上がってベッドの横にあるリボンを手に取ると老紳士を無視して部屋を出た。老紳士はその後を追つ。

レトロな洋館である遠坂邸は世間から隔絶されていると思われが

ちだが、凛の母の葵の性格からか近所付き合いは悪くない。また、この広い洋館を一人で管理している老紳士の努力により5年前の近寄りがたい雰囲気から一変して明るくなつた。

遠坂邸を生まれ変わらせたこの老紳士は凛が生まれる前に凛の父遠坂時臣の窮地を救つた人物らしく、偶然父の書斎にあつたメモから葵が連絡を取るとあっさりと遠坂の家で執事として働くことを快諾した。当時の凛もこれには驚いた。が、老紳士は完璧な執事でありながら戦闘もこなす事も分かり、その戦闘力は父をも上回つていたらしい。時臣は純粹な魔術師だったので戦闘に関して言えばそこまで強いわけではないが普通の人間が魔術師に勝つのはやはり難しい。父への尊敬もあつて凛は老紳士に弟子入りを申し込んだ。これが凛とウォルター・C・ドルネーズの最初の邂逅だった。以降ウォルターは凛をお嬢様と呼び、凛はウォルターを師と呼んでいる。あくまで訓練中だけではあるが。

「ウォルター、今日の朝食は何かしら？」

「本日はスクランブルエッグとトースト、アッサムのストレートでござります」

「そう、いつもありがとうございます」

「感謝の極み」

凛は朝食を食べない。5年前まではそうだった。しかしウォルターの必死の説得の末凛は朝食を食べるようになつた。もちろん口岸リーアル計算は完璧で、バランスも考えて作られている。その結果、凛の主に胸部は年々大きくなり始め現在はB82W56H78という奇跡のプロポーションを維持している。

「ふう、私もそろそろサー・ヴァントを呼ばないとね」

「まだクラスクも残つておつますので焦る必要はないかと。もしサー・ヴァントに襲われても凛お嬢様でしたら逃げるのは容易いでしょ  
うな」

「ええ、伊達に貴方の弟子をしているわけではないわ」

サラリと髪を靡かせてウォルターにウインクをする。が、凛の視界に車椅子の女性が映ると凛の表情は険しくなった。

「あら、やつと起きたのね。遅刻するわよ。……『めんなさいねウォルター、こんな娘で』

「母さん……いつも言つてるけどそれ止めてよね」

遠坂葵。凛の母で大和撫子を体現したような柔らかい物腰の女性で10年前の聖杯戦争によつて幼馴染の雁夜は吸血種になり、夫は亡くなり、両足を失つた。義足をつけてるので服の上からではわかりずらいが車椅子に乗つてるので足が不自由なのは一目瞭然だ。凛の魔術では無くなつた足の再生などできず歯がゆい思いをしている。直すにはそれこそ魔法かそれに近い奇跡が必要になる。

「止めてほしきなら時臣さんみたいに常に余裕をもつて優雅たれを  
もつと意識なさい」

「……はあい」

「まあまあ奥様。お嬢様は低血圧なのですからさめに見て頂けません  
か」

「ウォルター……貴方は凛に甘過ぎるのよ。遠坂の——」

「行くわよウォルター……もう話が長いのよ」

「恐れました」

いつもお説教のパターンを察知した凛はウォルターを連れてその場を離れた。

「年をとぬほどつてあんなつちやうのかなあ」

「我々英国人は老いすら楽しむのですが、この国では老いが罪になつてこゝようで若者からもいつまわるとやるせ無いですな」

「年よりが段々と増えて子供が減つている影響かもね。人間つて数が少ないものを大切にするから」

「なるほど、そうかもしれませんな」

凛はこの朝も普段と変わらず朝食をとつて化粧台の前で唸つてからお髪に入りの赤いゴートを学園指定の服の上に羽織つて家を出た——リボンも忘れずに髪の両端につけて。外気は冬の訪れを告げるよう肌を冷たく乾燥させる。凛は思わず「寒つ」と呟いて左右を確認。

「誰もいないわね」

万が一にもだらしない格好を見せるわけにはいかない。頬を軽く叩いて凛は澄ました顔で門を開け通学路を歩き始めた。

凛の通う穂群原学園は地元ではそこそこ名前の知られている私立

高校で偏差値は大体57程度の学園である。部活は全国レベルのものはほとんど無いが毎日学生たちが練習している姿が見られる。頭髪や服装に関しては緩いところがあり、多少髪を染めても注意されることはない。

凛が道行く生徒たちに紛れていると前方に見知った少女。かつて妹だった凛の半身が可憐なオーラを漂わせながら空を見つめていた。凛もつられて見上げると曇天の空が気分を沈ませるだけだった。

「何を見てるんですか、遠坂先輩？」

「……ッ！」

先ほどまで前方にいたはずの桜が隣にならんでいたのに驚いた凛は持っていた鞄を落としてしまった。留め金がしつかりとはまっていなかつたらしくその中身が周辺に散らばって他の生徒たちの視線を集めれる。

「大丈夫ですか、遠坂先輩。すみません突然声をかけてしまって」

「……いいえ、私の不注意ですから気にしないで間桐さん」

さつと教科書を拾つて服の汚れを払つ。

「あの、よろしければ一緒に登校しませんか？」

「……喜んで」

遠坂から間桐へ養子にだされた桜に負い目がある凛は桜の頼みを断ることなどできない。彼女が間桐でどんな仕打ちを受けていたかも知っているし前回の聖杯戦争に参加し最後まで生き残ったことも

知っているからだ。父時臣を殺したのも桜だと葵は凜に伝えていたが実は違うと検討をつけている。なぜなら桜は凜があげたリボンをまだつけているからだ。

「寒くなってきたわね」

「はい、朝起きるのが大変で・・・」

「・・・同意するわ。それで、最近旦那さんの様子はどう?」

「調子が良いので夜はそれはもう激しくて」

「あー、もう良いくわ」

凜はこの冬木市の管理者（セカンドオーナー）であるのでこの地の魔術師をもぐりや許可なしを除いて全て把握している。桜の結婚や雁夜の吸血鬼化に度肝を抜かれた凜を待っていたのは桜の怨氣。今では会うたびに生々しい話をする桜に辟易している。

「んでーー 参加するのかしら?」

「はい」

それつきり会話も無く校門前で別れた姉妹。凜はため息を吐いて額を手で押さえる。

「・・・何やつてんのよ私」

靴を履き替えて校舎内へと入る。田指すのは一年A組。階段を一段一段あがつて3階に到着すると廊下に海鮮物がコラコラと漂っている。

「あれ、遠坂じゃないか」

「・・・おはようございます、間桐くん」

海鮮物——の髪型をした間桐慎一は陽気に凛に話しかけた。

「今日は早いんですね」

「うん、まあね。早起きは二文の得つて言つけど本当だつたみたいだ。だって、こうして遠坂と逢えたんだから」

「・・・」

彼の父は10年前にどこかへ蒸発してしまった。間桐の家にいながら魔術には一切関わっていない彼が間桐の家に残れるはずもないで市内のアパートに一人暮らしをしている。父に捨てられたのを気にしている彼は人一倍努力を重ねて現在では学校中から「困ったときは慎一」と言われるほど頼られる存在になった。最近では同じ弓道部の主将との仲を噂されているが本人たちは断固として否定的だ。何故なら慎一が好きなのは遠坂凛なのだから。

「あ、ごめん。遠坂はこいつの嫌いだったね。それじゃあ僕はこれで失礼するよ。・・・また話しかけても良いかな？」

「ええ」

凛がそう答えると慎一は嬉しそうな顔でクラスへと戻つていった。凛はそれを見送つて思案する。彼は悪い人間でもダメな人間でもない。だが魔術師でもないのだ。魔術師の家系に生まれはしたが魔術の才能も知識もない彼の好意を受けるのは心が痛む。いつその事

はつきりと言えれば楽なのがそれが出来ればこうして悩むはずもない。

「・・・心の贅肉が溜まる一方ね。ダイエットしないと駄目かな」

「それ以上瘦せてどうするつもりなのさ?」

「痛ッ!!」

凛の咳きを聴いた彼女の親友美綴綾子は冗談交じりにわき腹を抓つて挨拶をした。ボーカルシューな彼女の雰囲気に合つた茶色のショートヘアが活発に揺れる。

「おはよー、遠坂。部活もやつてないのに今日は早いねえ。普通だつたらあと20分は寝られるのに」

「そういう美綴さんも今日は部活もないのに早いんですね・・・もしかして間桐くんは旦那だったりして?」

「な、なにこいつてんだよ!?」

仕返しの一発が綾子の余裕を奪つた。分かりやすすぎる彼女のリアクションに凛は思わず噴出す。本人の前だと更に分かりやすいはずなのだが慎一は全く気づいていない。恋する乙女と男は盲目なのだろうか。

「はいはい」

「いつか絶対にアンタを泣かせてやるわ」

「期待しないで待っていますね」

綾子は授業が始まるまで弁解を続けたがそれが却つて周囲の注目を集めることになり、泣き寝入りするしかなかつた。

始業のチャイムが鳴り、教師が出席を確認する。凜にとつて学業とは無駄にならないがなくてはそこまで困らない程度のものだ。だからと言つて疎かにすることはあつてはならない。普通の学業も魔術も両立してこそ遠坂凜であり、その在り方を彼女も気に入つていた。同じことを繰り返し行うのも大事ではあるが違う観点からアプリーチをすると同じものも違つて見えてくる。昔の考えと現代の考え方を併せ持つ器量。魔術師でありながら実戦を想定した技術を学ぶのもその辺りが一因している。

平和な学園生活も終わり慣れた家路を辿る。凜の表情は魔術師のそれに変わっていた。消えかけの太陽が名残惜しそうにアスファルトを照らす。

「さてと、学生は堪能したし今夜にでも召喚しないとね」

午前の時点ではアーチャーとバーサーカーが召喚されていた。残るクラスは五つ。狙うクラスは最良と名高いセイバー。本来であれば凜が一番実力を發揮できる日、時間に召喚するのが好ましいがそれでは万が一セイバーが召喚されてしまった場合取り返しがつかない。父から譲り受けた宝石を売り払つてまで手に入れた聖遺物がガラクタになつてしまつ。

「失敗できないのよ」

意識せず小石を蹴飛ばしていた凜は小石を軌跡をぼんやりと眺める。石は結構な勢いで転がり続け、やがて石に影が覆いかぶさる。凜が目線をあげると一人の男性が紺色のロングコートのポケットに両

手を入れて転がってきた小石を足で止める。そして彼は人懐っこい笑みを浮かべて片手を挙げた。

### 「久しぶりだな遠坂」

赤色と茶色の混じった短髪の少年。身長は170センチにも満たないが服の上からでも彼が一般人からかけ離れた強者であると感じられる。少年の手の甲には赤いタトウ。凛はそれを視認して理解してしまった。彼もまた自身の敵であると——。

「ええ、久しぶりね。衛宮家当主——衛宮士郎君」

嘗て友達だった二人はこうして望まぬ邂逅を遂げる。サーヴァント召喚の前にこのイレギュラー。頭が痛くなつてくるのを必死に顔に出さぬようにして凛は静かに溜息を吐いた。

### マスター紹介

name 間桐桜

マスター（バーサーカー）

原作と異なり髪の色は黒でストレートのロング。イメージカラーは藍色。悲劇のヒロインで病んでるで後輩で巨乳で虫で聖杯で黒くて可愛い。作者が二次小説を書く原因にもなった少女。多くの著者様が救いの手を差し伸べてくださるお陰でいろいろな桜ちゃんが見れるので嬉しい限りです。本作では魔術は一切使えません。また、雁夜一筋なので士郎に興味がありません。はやく映画化してくださいお願いします。

name 遠坂凜

マスター（現在は権利のみ）

黒いツインテール。イメージカラーは赤。赤い悪魔などとよばれることがある。聖杯戦争を骨子を組み上げた御三家の一角の後継者で先祖には魔法使いがいたらしい。かつての栄光を取り戻すべく聖杯戦争に挑む家系の生まれだが本人は「そんなものに頼らず自分の力で」という性格なので参戦の理由は家系として求めていたし、どうせなら貰つとく程度である。スレンダーな体系ではあつたが本作ではウォルターの完璧な栄養管理によつて胸囲が増した。また、原作と異なり言峰綺礼が死亡しているため体術ではなく糸を用いた殺人術を習得。原作士郎（初期状態）なら瞬殺が可能。ウォルターと違ひ魔術によつて糸を強化できるので技術では劣るが破壊力では勝る。糸の製造にかなりのコストがかかっているので宝石魔術は相対的に弱くなっている。

name イリヤスフィール・フォン・アインツベルン  
マスター（アーチャー）

永遠の合法ロリ。たまにブルマになつて道場に現れる。原作桜トルーエンドの彼女が眩しそぎて泣いた。本作ではバーサーカーではなくアーチャーを召喚。最強のマスターに最強のサーヴァント・・・勝てる気がしない。ギルガメッシュも退場しているので勝つのは極めて困難。

## 遠坂と老紳士の日常

「お嬢様、朝でござります」

「後、五分・・・」

午前6時30分。部活の無い学生でもそろそろ目を覚ます頃、少女はだらしなく布団に包まっていた。その彼女の寝台の側で険しい顔をしている老紳士。このやり取りはかれこれ30分続いている。痺れを切らせた老紳士は指を僅かに動かすと腕を真上へと振り上げた。それだけで少女を包んでいた布団は宙を舞い、包まっていた少女もまた宙を舞い、ベッドから落ちた。顔から落ちた少女は鼻を押されて、般若のような表情で老紳士を睨む。老紳士は慣れた表情で一コやかに朝の挨拶をする。

「おはようございます。よつやくお目覚めのようですな。朝食の準備が整つてありますので早く御越しください」

「・・・貴方はまず謝ることから始めるべきだわ」

学園一の美少女で文武両道の高嶺の花。遠坂凜は低血圧の影響でまるでゾンビのように伸びながらそう呟いた。絹にすら勝る黒く美しい髪を床に横たえ、前髪から覗く蒼い瞳は宝石に例えられても不思議ではないが、この状態では恐怖を煽るものでしかない。凜はゆらりと立ち上がってベッドの横にあるリボンを手に取ると老紳士を無視して部屋を出た。老紳士はその後を追つ。

レトロな洋館である遠坂邸は世間から隔絶されていると思われが

ちだが、凜の母の葵の性格からか近所付き合いは悪くない。また、この広い洋館を一人で管理している老紳士の努力により5年前の近寄りがたい雰囲気から一変して明るくなつた。

遠坂邸を生まれ変わらせたこの老紳士は凜が生まれる前に凜の父遠坂時臣の窮地を救つた人物らしく、偶然父の書斎にあつたメモから葵が連絡を取るとあっさりと遠坂の家で執事として働くことを快諾した。当時の凜もこれには驚いた。が、老紳士は完璧な執事でありながら戦闘もこなす事も分かり、その戦闘力は父をも上回つていたらしい。時臣は純粹な魔術師だったので戦闘に関して言えばそこまで強いわけではないが普通の人間が魔術師に勝つのはやはり難しい。父への尊敬もあつて凜は老紳士に弟子入りを申し込んだ。これが凜とウォルター・C・ドルネーズの最初の邂逅だった。以降ウォルターは凜をお嬢様と呼び、凜はウォルターを師と呼んでいる。あくまで訓練中だけではあるが。

「ウォルター、今日の朝食は何かしら？」

「本日はスクランブルエッグとトースト、アッサムのストレートでござります」

「そう、いつもありがとうございます」

「感謝の極み」

凜は朝食を食べない。5年前まではそうだった。しかしウォルターの必死の説得の末凜は朝食を食べるようになった。もちろんカロリー計算は完璧で、バランスも考えて作られている。その結果、凜の主に胸部は年々大きくなり始め現在はB82W56H78という奇跡のプロポーションを維持している。

「ふう、私もそろそろサー・ヴァントを呼ばないとね」

「まだクラスクも残つておつますので焦る必要はないかと。もしサー・ヴァントに襲われても凛お嬢様でしたら逃げるのは容易いでしょ  
うな」

「ええ、伊達に貴方の弟子をしているわけではないわ」

サラリと髪を靡かせてウォルターにウインクをする。が、凛の視界に車椅子の女性が映ると凛の表情は険しくなった。

「あら、やつと起きたのね。遅刻するわよ。……『めんなさいねウォルター、こんな娘で』

「母さん……いつも言つてるけどそれ止めてよね」

遠坂葵。凛の母で大和撫子を体現したような柔らかい物腰の女性で10年前の聖杯戦争によつて幼馴染の雁夜は吸血種になり、夫は亡くなり、両足を失つた。義足をつけてるので服の上からではわかりずらいが車椅子に乗つてるので足が不自由なのは一目瞭然だ。凛の魔術では無くなつた足の再生などできず歯がゆい思いをしている。直すにはそれこそ魔法かそれに近い奇跡が必要になる。

「止めてほしきなら時臣さんみたいに常に余裕をもつて優雅たれを  
もつと意識なさい」

「……はあい」

「まあまあ奥様。お嬢様は低血圧なのですからさめに見て頂けません  
か」

「ウォルター……貴方は凛に甘過ぎるのよ。遠坂の——」

「行くわよウォルター……もう話が長いのよ」

「恐れました」

いつもお説教のパターンを察知した凛はウォルターを連れてその場を離れた。

「年をとぬほどつてあんなつちやうのかなあ」

「我々英国人は老いすら楽しむのですが、この国では老いが罪になつてこゐるよいで若者からもいつまわれるといせ無いですね」

「年よりが段々と増えて子供が減つている影響かもね。人間つて数が少ないものを大切にするから」

「なるほど、さうかもしれませんな」

凛はこの朝も普段と変わらず朝食をとつて化粧台の前で唸つてからお髪に入りの赤いゴートを学園指定の服の上に羽織つて家を出た——リボンも忘れずに髪の両端につけて。外気は冬の訪れを告げるよう肌を冷たく乾燥させる。凛は思わず「寒つ」と呟いて左右を確認。

「誰もいないわね」

万が一にもだらしない格好を見せるわけにはいかない。頬を軽く叩いて凛は澄ました顔で門を開け通学路を歩き始めた。

凛の通う穂群原学園は地元ではそこそこ名前の知られている私立

高校で偏差値は大体57程度の学園である。部活は全国レベルのものはほとんど無いが毎日学生たちが練習している姿が見られる。頭髪や服装に関しては緩いところがあり、多少髪を染めても注意されることはない。

凛が道行く生徒たちに紛れていると前方に見知った少女。かつて妹だった凛の半身が可憐なオーラを漂わせながら空を見つめていた。凛もつられて見上げると曇天の空が気分を沈ませるだけだった。

「何を見てるんですか、遠坂先輩？」

「……ッ！」

先ほどまで前方にいたはずの桜が隣にならんでいたのに驚いた凛は持っていた鞄を落としてしまった。留め金がしつかりとはまっていなかつたらしくその中身が周辺に散らばって他の生徒たちの視線を集めれる。

「大丈夫ですか、遠坂先輩。すみません突然声をかけてしまって」

「……いいえ、私の不注意ですから気にしないで間桐さん」

さつと教科書を拾つて服の汚れを払つ。

「あの、よろしければ一緒に登校しませんか？」

「……喜んで」

遠坂から間桐へ養子にだされた桜に負い目がある凛は桜の頼みを断ることなどできない。彼女が間桐でどんな仕打ちを受けていたかも知っているし前回の聖杯戦争に参加し最後まで生き残ったことも

知っているからだ。父時臣を殺したのも桜だと葵は凜に伝えていたが実は違うと検討をつけている。なぜなら桜は凜があげたリボンをまだつけているからだ。

「寒くなってきたわね」

「はい、朝起きるのが大変で・・・」

「・・・同意するわ。それで、最近旦那さんの様子はどう?」

「調子が良いので夜はそれはもう激しくて」

「あー、もう良いくわ」

凜はこの冬木市の管理者（セカンドオーナー）であるのでこの地の魔術師をもぐりや許可なしを除いて全て把握している。桜の結婚や雁夜の吸血鬼化に度肝を抜かれた凜を待っていたのは桜の怨氣。今では会うたびに生々しい話をする桜に辟易している。

「んでーー 参加するのかしら?」

「はい」

それつきり会話も無く校門前で別れた姉妹。凜はため息を吐いて額を手で押さえる。

「・・・何やつてんのよ私」

靴を履き替えて校舎内へと入る。田指すのは一年A組。階段を一段一段あがつて3階に到着すると廊下に海鮮物がコラコラと漂っている。

「あれ、遠坂じゃないか」

「・・・おはようございます、間桐くん」

海鮮物——の髪型をした間桐慎一は陽気に凛に話しかけた。

「今日は早いんですね」

「うん、まあね。早起きは二文の得つて言つけど本当だつたみたいだ。だって、こうして遠坂と逢えたんだから」

「・・・」

彼の父は10年前にどこかへ蒸発してしまった。間桐の家にいながら魔術には一切関わっていない彼が間桐の家に残れるはずもないで市内のアパートに一人暮らしをしている。父に捨てられたのを気にしている彼は人一倍努力を重ねて現在では学校中から「困ったときは慎一」と言われるほど頼られる存在になった。最近では同じ弓道部の主将との仲を噂されているが本人たちは断固として否定的だ。何故なら慎一が好きなのは遠坂凛なのだから。

「あ、ごめん。遠坂はこいつの嫌いだったね。それじゃあ僕はこれで失礼するよ。・・・また話しかけても良いかな？」

「ええ」

凛がそう答えると慎一は嬉しそうな顔でクラスへと戻つていった。凛はそれを見送つて思案する。彼は悪い人間でもダメな人間でもない。だが魔術師でもないのだ。魔術師の家系に生まれはしたが魔術の才能も知識もない彼の好意を受けるのは心が痛む。いつその事

はつきりと言えれば楽なのだがそれが出来ればこうして悩むはずもない。

「・・・心の贅肉が溜まる一方ね。ダイエットしないと駄目かな」

「それ以上瘦せてどうするつもりなのさ?」

「痛ッ!!」

凛の咳きを聴いた彼女の親友美綴綾子は冗談交じりにわき腹を抓つて挨拶をした。ボーカルシューな彼女の雰囲気に合つた茶色のショートヘアが活発に揺れる。

「おはよー、遠坂。部活もやつてないのに今日は早いねえ。普通だつたらあと20分は寝られるのに」

「そういう美綴さんも今日は部活もないのに早いんですね・・・もしかして聞桐くん皿洗いだったりして?」

「な、なにこいつてんだよ!?」

仕返しの一発が綾子の余裕を奪つた。分かりやすすぎる彼女のリアクションに凛は思わず噴出す。本人の前だと更に分かりやすいはずなのだが慎一は全く気づいていない。恋する乙女と男は盲目なのだろうか。

「はいはい」

「いつか絶対にアンタを泣かせてやるわ」

「期待しないで待っていますね」

綾子は授業が始まるまで弁解を続けたがそれが却つて周囲の注目を集めることになり、泣き寝入りするしかなかつた。

始業のチャイムが鳴り、教師が出席を確認する。凜にとつて学業とは無駄にならないがなくてはそこまで困らない程度のものだ。だからと言つて疎かにすることはあつてはならない。普通の学業も魔術も両立してこそ遠坂凜であり、その在り方を彼女も気に入つていた。同じことを繰り返し行うのも大事ではあるが違う観点からアプローチをすると同じものも違つて見えてくる。昔の考えと現代の考え方を併せ持つ器量。魔術師でありながら実戦を想定した技術を学ぶのもその辺りが一因している。

平和な学園生活も終わり慣れた家路を辿る。凜の表情は魔術師のそれに変わっていた。消えかけの太陽が名残惜しそうにアスファルトを照らす。

「さてと、学生は堪能したし今夜にでも召喚しないとね」

午前の時点ではアーチャーとバーサーカーが召喚されていた。残るクラスは五つ。狙うクラスは最良と名高いセイバー。本来であれば凜が一番実力を發揮できる日、時間に召喚するのが好ましいがそれでは万が一セイバーが召喚されてしまった場合取り返しがつかない。父から譲り受けた宝石を売り払つてまで手に入れた聖遺物がガラクタになつてしまつ。

「失敗できないのよ」

意識せず小石を蹴飛ばしていた凜は小石を軌跡をぼんやりと眺める。石は結構な勢いで転がり続け、やがて石に影が覆いかぶさる。凜が目線をあげると一人の男性が紺色のロングコートのポケットに両

手を入れて転がってきた小石を足で止める。そして彼は人懐っこい笑みを浮かべて片手を挙げた。

### 「久しぶりだな遠坂」

赤色と茶色の混じった短髪の少年。身長は170センチにも満たないが服の上からでも彼が一般人からかけ離れた強者であると感じられる。少年の手の甲には赤いタトウ。凛はそれを視認して理解してしまった。彼もまた自身の敵であると——。

「ええ、久しぶりね。衛宮家当主——衛宮士郎君」

嘗て友達だった二人はこうして望まぬ邂逅を遂げる。サーヴァント召喚の前にこのイレギュラー。頭が痛くなつてくるのを必死に顔に出さぬようにして凛は静かに溜息を吐いた。

### マスター紹介

name 間桐桜

マスター（バーサーカー）

原作と異なり髪の色は黒でストレートのロング。イメージカラーは藍色。悲劇のヒロインで病んでるで後輩で巨乳で虫で聖杯で黒くて可愛い。作者が二次小説を書く原因にもなった少女。多くの著者様が救いの手を差し伸べてくださるお陰でいろいろな桜ちゃんが見れるので嬉しい限りです。本作では魔術は一切使えません。また、雁夜一筋なので士郎に興味がありません。はやく映画化してくださいお願いします。

name 遠坂凜

マスター（現在は権利のみ）

黒いツインテール。イメージカラーは赤。赤い悪魔などとよばれることがある。聖杯戦争を骨子を組み上げた御三家の一角の後継者で先祖には魔法使いがいたらしい。かつての栄光を取り戻すべく聖杯戦争に挑む家系の生まれだが本人は「そんなものに頼らず自分の力で」という性格なので参戦の理由は家系として求めていたし、どうせなら貰つとく程度である。スレンダーな体系ではあつたが本作ではウォルターの完璧な栄養管理によつて胸囲が増した。また、原作と異なり言峰綺礼が死亡しているため体術ではなく糸を用いた殺人術を習得。原作士郎（初期状態）なら瞬殺が可能。ウォルターと違ひ魔術によつて糸を強化できるので技術では劣るが破壊力では勝る。糸の製造にかなりのコストがかかっているので宝石魔術は相対的に弱くなっている。

name イリヤスフィール・フォン・アインツベルン  
マスター（アーチャー）

永遠の合法ロリ。たまにブルマになつて道場に現れる。原作桜トルーエンドの彼女が眩しそぎて泣いた。本作ではバーサーカーではなくアーチャーを召喚。最強のマスターに最強のサーヴァント・・・勝てる気がしない。ギルガメッシュも退場しているので勝つのは極めて困難。